

# 住宅火災・放火火災の実態

(令和3年中)

東京消防庁  
防災部防災安全課

# 目 次

<b>第 1 章 住宅火災の実態</b> .....	<b>- 1 -</b>
<b>1 住宅火災の概要</b> .....	<b>- 1 -</b>
(1) 住宅火災件数.....	- 1 -
(2) 住宅火災による死者数.....	- 2 -
(3) 住宅火災の焼損床面積.....	- 3 -
<b>2 住宅火災の発生状況</b> .....	<b>- 4 -</b>
(1) 出火原因別.....	- 4 -
(2) 着火物別.....	- 4 -
(3) 出火箇所別.....	- 5 -
(4) 初期消火別.....	- 5 -
<b>3 住宅火災による死傷者の状況</b> .....	<b>- 7 -</b>
(1) 出火原因別.....	- 7 -
(2) 着火物別.....	- 10 -
(3) 出火箇所別.....	- 13 -
(4) 月別・時間帯別.....	- 14 -
(5) 年齢別・性別.....	- 16 -
(6) 世帯構成別.....	- 17 -
(7) 住宅火災時の行為別.....	- 17 -
<b>4 住宅用火災警報器等の概要</b> .....	<b>- 19 -</b>
(1) 住宅用火災警報器等の設置状況.....	- 19 -
(2) 住警器等設置有無別の比較.....	- 20 -
(3) 住警器の全部設置・一部設置の比較.....	- 21 -
(4) 奏功事例の内訳.....	- 22 -
<b>5 住宅火災から身の安全を守るためにできること</b> .....	<b>- 23 -</b>
<b>第 2 章 放火火災の実態</b> .....	<b>- 24 -</b>
<b>1 放火火災の概要</b> .....	<b>- 24 -</b>
<b>2 放火火災の発生状況</b> .....	<b>- 24 -</b>
(1) 月別発生状況.....	- 24 -
(2) 曜日別発生状況.....	- 25 -
(3) 時間帯別発生状況.....	- 25 -
(4) 連続放火火災の発生状況.....	- 26 -
(5) 主な火元建物用途別の発生状況.....	- 27 -
(6) 主な放火場所と着火物.....	- 28 -

事例編 .....	- 29 -
1 主な住宅火災の事例 .....	- 29 -
(1) たばこ .....	- 29 -
(2) こんろ .....	- 29 -
(3) ストープ .....	- 30 -
(4) その他の出火原因 .....	- 30 -
2 住宅用防災機器等の主な奏功事例 .....	- 31 -
(1) 住宅用火災警報器 .....	- 31 -
(2) 消火器 .....	- 31 -
(3) エアゾール式簡易消火具 .....	- 32 -
資料編 .....	- 33 -
1 区市町村別住宅火災状況 .....	- 33 -
2 区市町村別住宅火災による死者状況 .....	- 34 -
3 区市町村別放火火災状況 .....	- 35 -
4 広報資料（STOP！住宅防火シリーズ） .....	- 36 -
(1) STOP！着衣着火 .....	- 36 -
(2) STOP！たばこ火災 .....	- 38 -
(3) STOP！ストーブ火災 .....	- 40 -
(4) STOP！こんろ火災 .....	- 42 -
(5) STOP！電気火災 .....	- 44 -

※記載している小数点以下の数値は四捨五入しており、個々の数値の和が合計と一致しない場合があります。

# 第1章 住宅火災の実態

(※火災による死者及び住宅火災による死者・負傷者は自損によるもの及び消防職員・消防団員を除く。)

## 1 住宅火災の概要

### (1) 住宅火災件数

令和3年中の総火災件数は3,939件でした。このうち住宅火災（住宅《複合用途建物の住宅部分を含む。》及び共同住宅《寄宿舍を含む。》から出火した火災をいう。）は1,617件で、前年に比べ、64件増加しました（図1-1）。

また、建物から出火した火災の件数は2,720件、このうち住宅火災の割合は59.4%でした。住宅火災の内訳は、住宅600件（37.1%）、共同住宅1,017件（62.9%）となっています（図1-1、表1-1、表1-2、図1-2）。

※1 治外法権及び管外からの延焼火災は、総火災件数のみ計上します。  
 ※2 「建物から出火した火災」とは火元の用途が建物の火災です。

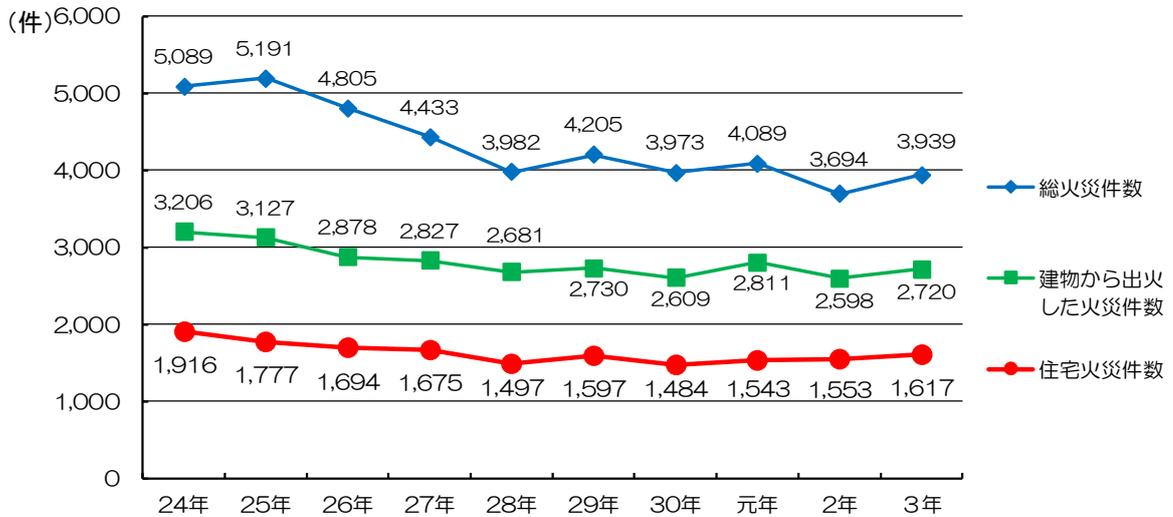


図1-1 過去10年間の住宅火災件数等の推移

表1-1 過去10年間の住宅火災件数等

年 別	24年	25年	26年	27年	28年	29年	30年	元年	2年	3年
総火災件数	5,089	5,191	4,805	4,433	3,982	4,205	3,973	4,089	3,694	3,939
建物から出火した火災件数	3,206	3,127	2,878	2,827	2,681	2,730	2,609	2,811	2,598	2,720
住宅火災件数	1,916	1,777	1,694	1,675	1,497	1,597	1,484	1,543	1,553	1,617
建物から出火した火災に対する住宅火災の割合	59.8%	56.8%	58.9%	59.3%	55.8%	58.5%	56.9%	54.9%	59.8%	59.4%

表1-2 建物から出火した火災の内訳

建物から出火した火災 2,720件	
住宅火災件数	1,617件 (59.4%)
住宅	600件 (37.1%)
共同住宅	1,017件 (62.9%)
住宅火災以外の建物から出火した火災	1,103件 (40.6%)

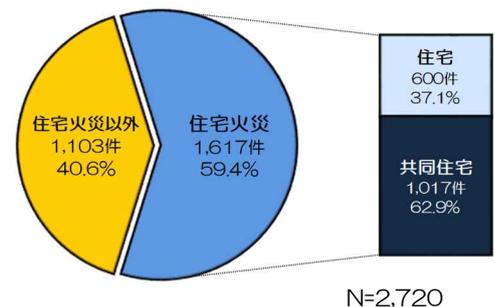


図1-2 建物から出火した火災の内訳

## (2) 住宅火災による死者数

令和3年中の火災による死者は72人で、前年に比べ4人減少しました。このうち自損を除く住宅火災による死者は69人で、前年に比べ2人減少しました。火災による死者のうち住宅火災による死者の占める割合は、95.8%となっています(表1-3、図1-3)。

住宅火災による死者69人のうち、65歳以上の高齢者(以下「高齢者」という。)は、54人と全体の78.3%を占め、高い割合となっています(図1-3、図1-4、表1-3)。

また、住宅火災による死者を用途別でみると、住宅で44人(63.8%)、共同住宅で25人(36.2%)の死者が発生しており、住宅の割合が高くなっています(表1-4、図1-5)。

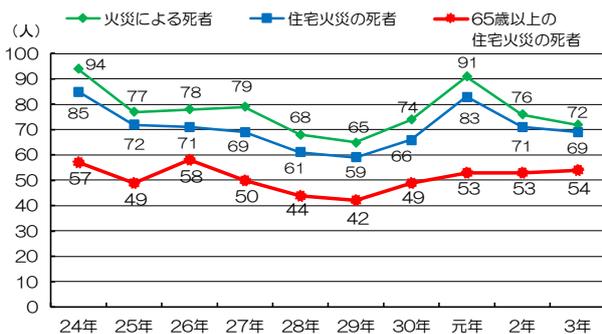


図1-3 過去10年間の住宅火災等による死者数の推移

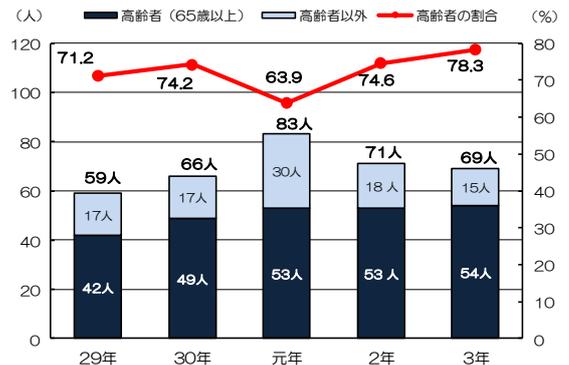


図1-4 過去5年間の住宅火災による死者数と高齢者の割合

表1-3 過去10年間の住宅火災による死者数

年	別	24年	25年	26年	27年	28年	29年	30年	元年	2年	3年
火災による死者		94	77	78	79	68	65	74	91	76	72
住宅火災による死者		85	72	71	69	61	59	66	83	71	69
住宅火災による死者の火災による死者に対する割合		90.4%	93.5%	91.0%	87.3%	89.7%	90.8%	89.2%	91.2%	93.4%	95.8%
高齢者の住宅火災による死者		57	49	58	50	44	42	49	53	53	54
高齢者の住宅火災による死者割合		67.1%	68.1%	81.7%	72.5%	72.1%	71.2%	74.2%	63.9%	74.6%	78.3%

表1-4 住宅火災による死者の内訳

用途別	死者数 (高齢者数)	割合
住宅	44(34)	63.8%
共同住宅	25(20)	36.2%
合計	69(54)	100%

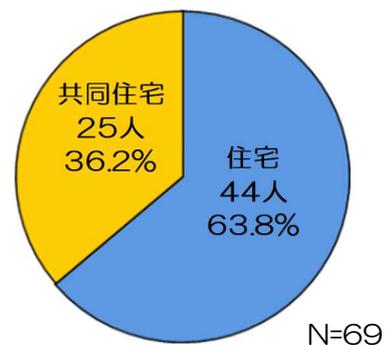


図1-5 住宅用途別死者の内訳

高齢者と高齢者以外の人口 10 万人あたりの住宅火災による死者数を比較すると、65 歳未満の死者は 0.15 人発生しているのに対し、65 歳以上 75 歳未満の死者は 1.03 人と約 6.9 倍に増加し、さらに 75 歳以上の死者は 2.40 人と 16 倍に増加しています（表 1-5、図 1-6）。

表 1-5 高齢者死者数と人口

年齢別	死者	管内人口	人口 10 万人あたりの死者発生数
75 歳以上	39	1,627,082	2.40
75 歳未満 65 歳以上	15	1,455,861	1.03
65 歳未満	15	10,098,699	0.15

※管内人口：令和 3 年 1 月 1 日現在

（「住民基本台帳による東京都の世帯と人口」東京都より）

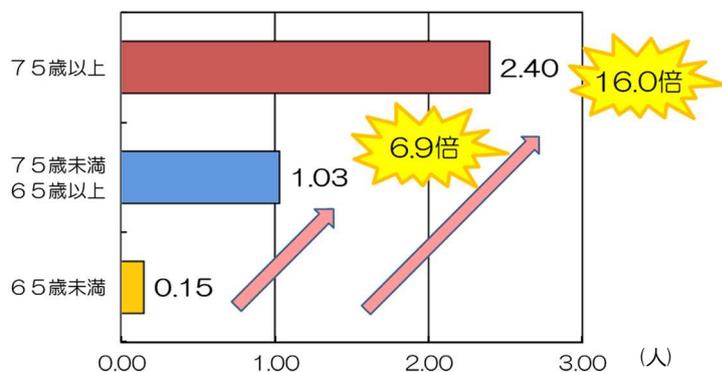


図 1-6 年齢別人口 10 万人あたりの住宅火災による死者数

### (3) 住宅火災の焼損床面積

令和 3 年中の住宅火災の焼損床面積は 11,070 m<sup>2</sup>で、前年に比べ 1,734 m<sup>2</sup>増加しました。

また、住宅火災 1 件あたりの平均焼損床面積は 6.85 m<sup>2</sup>で、前年に比べ 0.84 m<sup>2</sup>増加しました（図 1-7）。

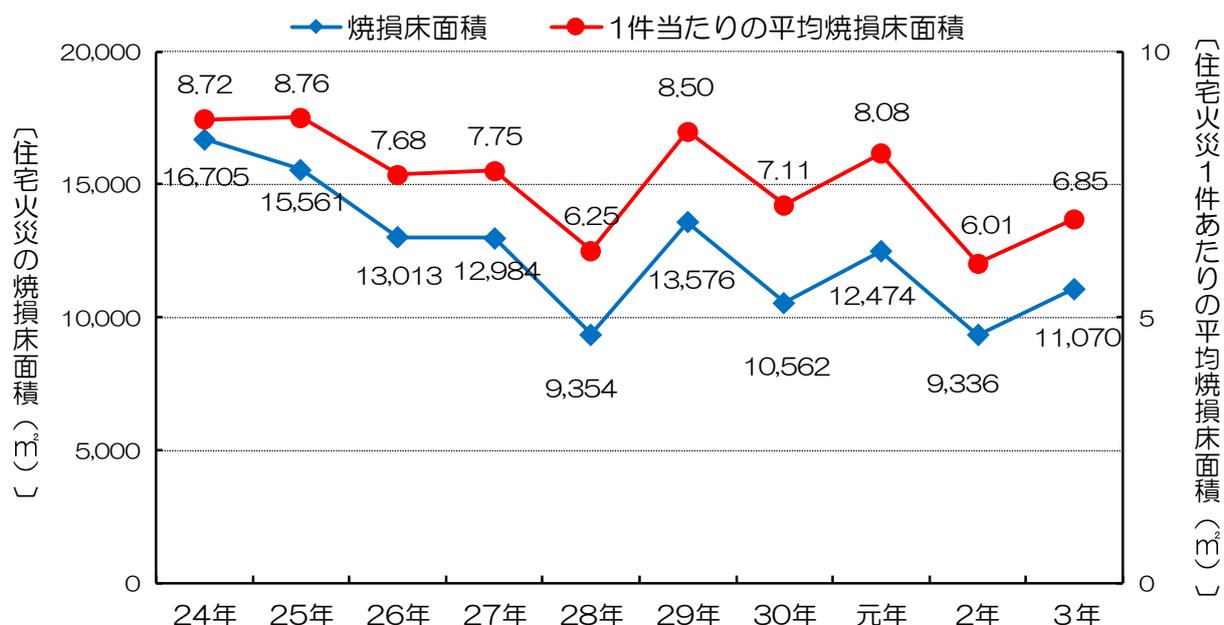


図 1-7 過去 10 年間の住宅火災の焼損床面積の推移

## 2 住宅火災の発生状況

### (1) 出火原因別

住宅火災 1,617 件の発生を出火原因別にみると、「こんろ」が 377 件（23.3%）と最も多く、次いで「たばこ」が 223 件（13.8%）、「放火」が 105 件（6.5%）でした（表 1-6、図 1-8）。

### (2) 着火物別

着火物別にみると、「くず類」が 210 件（13.0%）と最も多く、次いで「布団類」が 134 件（8.3%）、「紙類」が 128 件（7.9%）でした（表 1-7、図 1-9）。

表 1-6 出火原因別住宅火災件数

出火原因	住宅火災		
	合計	住宅	共同住宅
こんろ	377	114	263
たばこ	223	52	171
放火	105	32	73
ストーブ	95	48	47
ロウソク	36	16	20
コード	29	14	15
火遊び	6	4	2
その他	617	261	356
不明	129	59	70
合計	1,617	600	1,017

- ※1 「こんろ」は、ガステーブル等及び電気こんろを合わせたものです。  
 ※2 「放火」は、放火の疑いを含みます。  
 ※3 「ストーブ」は、電気、ガス及び石油を合わせたものです。

表 1-7 着火物別住宅火災件数

着火物	住宅火災		
	合計	住宅	共同住宅
くず類	210	52	158
布団等	134	46	88
紙類	128	45	83
衣類・繊維類	111	44	67
天ぷら油	107	20	87
ガス類	85	28	57
内装・建具・家具類	70	33	37
着衣	47	26	21
カーテン・じゅうたん等	24	7	17
電線被覆	23	14	9
ガソリン等	10	4	6
その他	549	225	324
不明	119	56	63
合計	1,617	600	1,017

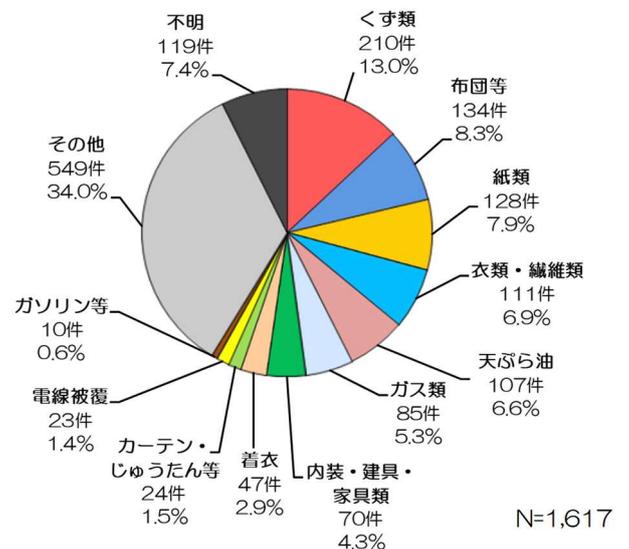
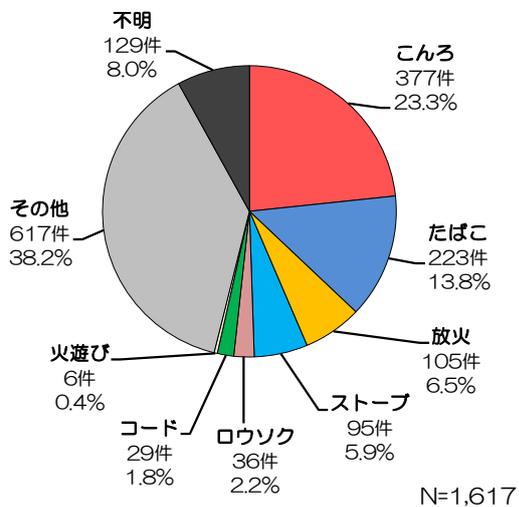


図 1-8 住宅火災の出火原因別の割合

図 1-9 住宅火災の着火物別の割合

### (3) 出火箇所別

出火箇所別にみると、「居室等」が682件（42.2%）と最も多く、次いで「台所・キッチン等」が638件（39.5%）となっており、これらを合わせると全体の約8割（81.6%）を占めています（表1-8、図1-10）。

表1-8 出火箇所別住宅火災件数

出火箇所	住宅火災		
	合計	住宅	共同住宅
居室等	682	274	408
台所・キッチン等	638	225	413
バルコニー	82	15	67
便所・洗面所・浴室等	67	33	34
廊下・階段等	48	12	36
玄関・ホール	27	7	20
車庫・駐車場等	10	4	6
建物の外周部	6	3	3
その他	55	26	29
不明	2	1	1
合計	1,617	600	1,017

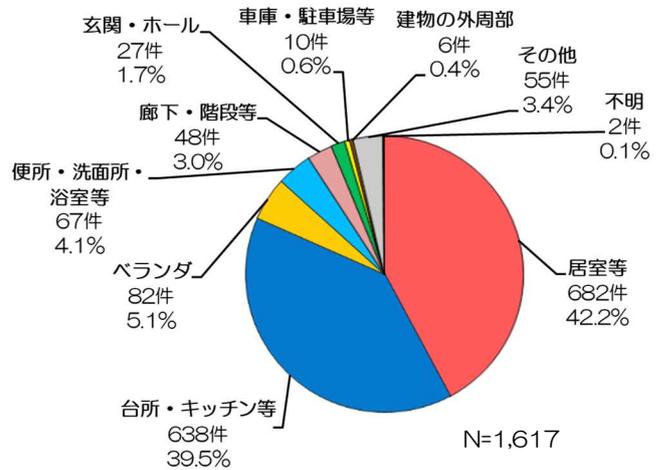


図1-10 住宅火災の出火箇所別の割合

### (4) 初期消火別

令和3年中の住宅火災における初期消火実施状況をみると、住宅火災1,617件のうち、「初期消火実施」が1,079件（66.7%）、「初期消火なし」が538件（33.3%）でした。

また、「初期消火実施」のうち「成功」・「失敗」別にみると、「成功」が865件（80.2%）、「失敗」が214件（19.8%）であり、「成功」した件数が約4倍となっています（図1-11）。初期消火「失敗」の理由には、「発見が遅れた」、「あせり消火できなかった」、「煙が充満していた」、「避難に重点をおいた」等がありました。

令和3年中の住宅火災における初期消火実施状況を、火災100件当たりの死者数、火災1件当たりの損害額及び焼損床面積で比較すると、全ての項目で初期消火実施の方が被害は少なくなっています（図1-12-1～3）。

次に、初期消火実施を「成功」と「失敗」に分け、初期消火が「成功」、「失敗」及び「なし」の状況で、火災100件当たりの死者数、火災1件当たりの損害額及び焼損床面積で比較すると、全ての項目で初期消火が「成功」した方が被害は少なくなっています（図1-12-4～6）。

最後に、初期消火が「成功」した火災と、初期消火が「失敗・なし」の火災について、火災100件当たりの死者数、火災1件当たりの損害額及び焼損床面積で比較すると、全ての項目で初期消火が「成功」した方が被害は少なくなっています（図1-12-7～9）。

以上の結果から、住宅火災による被害の軽減には確実な初期消火が重要であることが分かります。

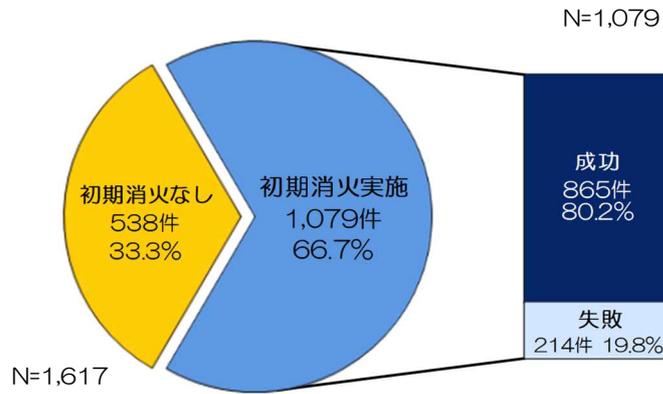


図 1-11 初期消火実施状況

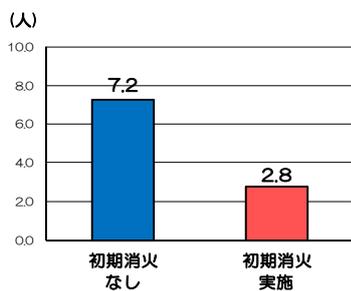


図 1-12-1 火災 100 件あたりの死者数

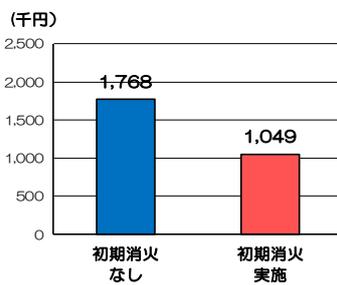


図 1-12-2 火災 1 件あたりの損害額

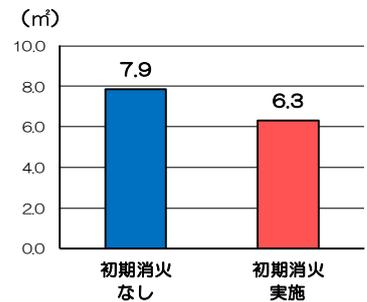


図 1-12-3 火災 1 件あたりの焼損床面積

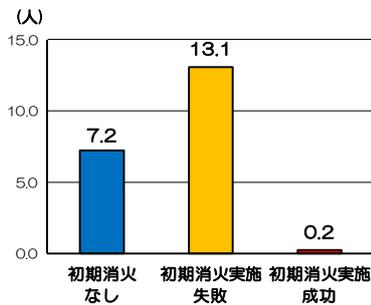


図 1-12-4 火災 100 件あたりの死者数

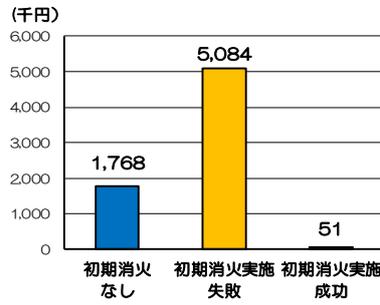


図 1-12-5 火災 1 件あたりの損害額

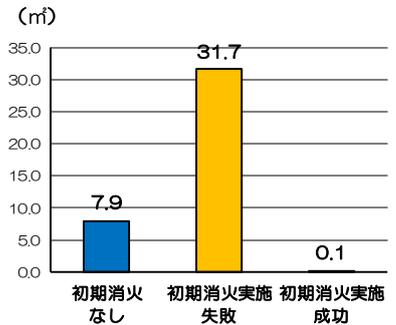


図 1-12-6 火災 1 件あたりの焼損床面積

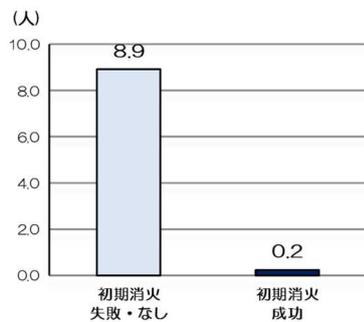


図 1-12-7 火災 100 件あたりの死者数

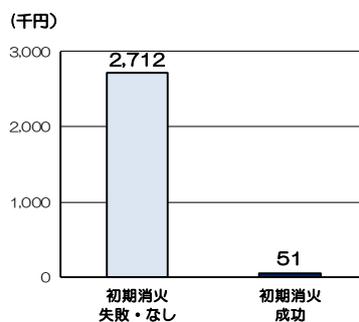


図 1-12-8 火災 1 件あたりの損害額

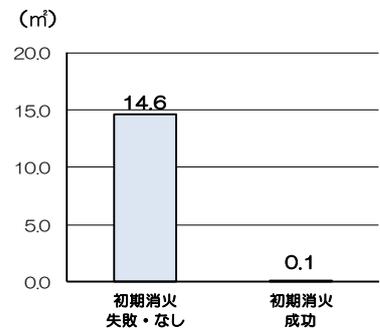


図 1-12-9 火災 1 件あたりの焼損床面積

図 1-12 令和 3 年中の初期消火実施別状況

### 3 住宅火災による死傷者の状況

#### (1) 出火原因別

##### ア 死者が発生した住宅火災の出火原因

住宅火災による死者 69 人を出火原因別にみると、「たばこ」が 15 人（21.7%）と最も多く、次いで「ストーブ」が 9 人（13.0%）、「こんろ」が 6 人（8.7%）でした（表 1-9、図 1-13）。例年は、「たばこ」、「ストーブ」、「こんろ」が死者発生を伴う住宅火災の出火原因における上位 3 位を占めており、令和 3 年もその傾向が見られました。

表 1-9 出火原因別死者数

出火原因	死者数 (高齢者数)	死者発生 火災件数	住宅 火災件数	死者が生じた 火災発生率
たばこ	15(9)	13	223	5.8%
ストーブ	9(8)	9	95	9.5%
こんろ	6(6)	6	377	1.6%
コード	4(3)	3	29	10.3%
放火	3(1)	3	105	2.9%
ロウソク	1(1)	1	36	2.8%
火遊び	-(-)	-	6	0.0%
その他	9(9)	8	617	1.3%
不明	22(17)	19	129	14.7%
合計	69(54)	62	1,617	3.8%

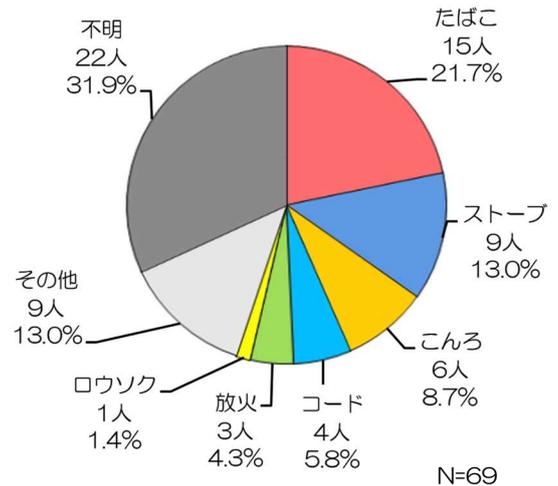


図 1-13 出火原因別死者の割合

※1 「こんろ」は、ガステーブル等及び電気こんろを合わせたものです。

※2 「放火」は、放火の疑いを含みます。

※3 「ストーブ」は、電気、ガス及び石油を合わせたものです。

住宅火災発生の経過を上位 3 つの出火原因別にみると、それぞれ特徴がありました。

最も多くの死者が発生した出火原因である「たばこ」による経過をみると、死者 15 人のうち「火源の落下」が 9 人、「不始末」が 5 人、「火源の接触」が 1 人でした。「火源の落下」とは、たばこの火源が布団や衣類等の可燃物に着火することを言います。「不始末」とは、火種の残った吸殻をごみ箱や灰皿に捨てることで可燃物に着火することを言います。

また、性別でみると、女性が 5 人であることに対して男性が 10 人と、男性の死者が多くの割合を占めています（表 1-10-1、図 1-14-1）。

表 1-10-1 たばこによる火災の経過内訳

経過	死者数 (高齢者数)	男性	女性
火源の落下	9(7)	7	2
不始末	5(2)	3	2
火源の接触	1(0)	0	1
合計	15(9)	10	5

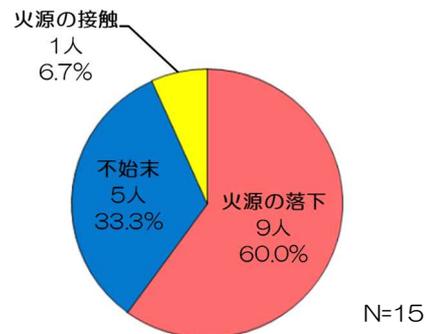


図 1-14-1 たばこによる住宅火災死者の経過

次に、「ストーブ」による住宅火災の経過をみると、死者 9 人のうち「可燃物の接触」が 4 人、「引火する」が 1 人、「不明」が 4 人でした。「可燃物の接触」とは、ストーブの周囲にある衣類等の可燃物が接触し着火することを言います。「可燃物の接触」の死者 4 人のうち、3 人が電気ストーブを使用していました（表 1-10-2、図 1-14-2）。

表 1-10-2 ストーブによる火災の経過内訳

経過	死者数 (高齢者数)	男性	女性
可燃物の接触	4 (4)	0	4
引火する	1 (1)	0	1
不明	4 (3)	3	1
合計	9 (8)	3	6

※ 死者 9 人のうち 5 人が電気ストーブによるもの。

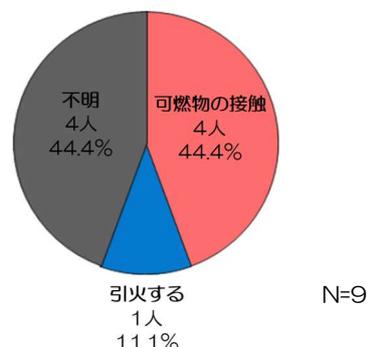


図 1-14-2 ストーブによる住宅火災死者の経過

続いて、「こんろ」による住宅火災の経過をみると、死者 6 人のうち「可燃物の接触」が 5 人、「使用の誤り」が 1 人でした。「可燃物の接触」の死者 5 人の着火物は、こんろ周りに置かれた「ごみくず」、「紙・紙製品」及び「合成樹脂」等によるものでした（表 1-10-3、図 1-14-3）。

表 1-10-3 こんろによる火災の経過内訳

経過	死者数 (高齢者数)	男性	女性
可燃物の接触	5 (5)	3	2
使用の誤り	1 (1)	0	1
合計	6 (6)	3	3

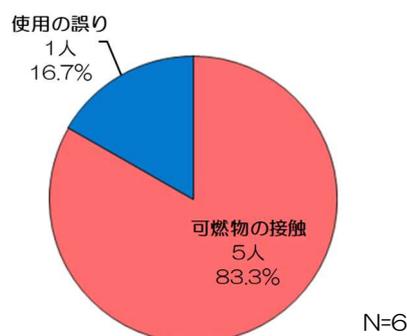


図 1-14-3 こんろによる住宅火災死者の経過

最後に、「コード」を出火原因とする火災で 4 人が亡くなりました。また、住宅火災のうち、電気が関係する漏電や電線の短絡、スパーク、半断線、トラッキング等による発熱によって起こる火災を「電気コード火災等」とすると、令和 3 年中は 371 件発生し、昨年よりも 73 件増加しました。電気コード火災等による死者は 7 人発生しており、昨年から 2 人増加しました（図 1-15）。

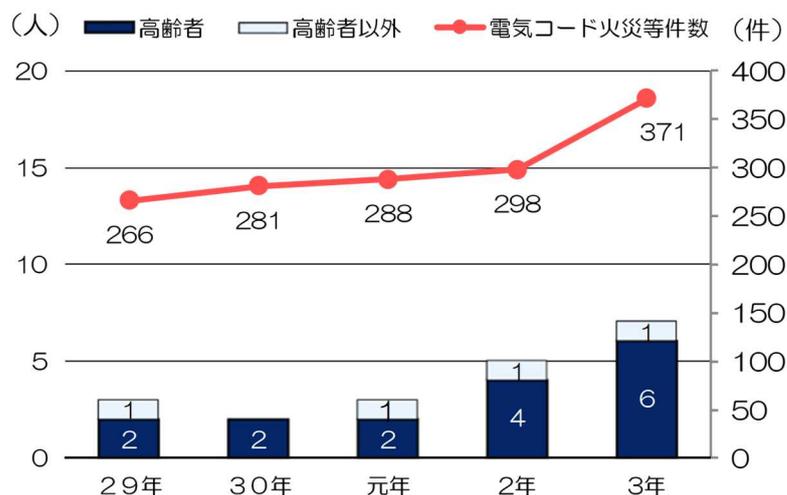


図 1-15 過去 5 年間の住宅火災における電気コード火災等の死者数及び火災件数の推移

死者が発生した「電気コード火災等」の主な出火原因について整理すると、テーブルタップ等の「コード」、「電気冷蔵庫」、「屋内線」の順で死者が多く発生しました（図 1-16）。

経過別にみると、「電線が短絡する」、「金属の接触部が過熱する」、「トラッキング※」の順で多く発生しました（図 1-17）。

※トラッキングとは：湿気を含むホコリ等が差し込みプラグの差し刃間に付着した状態で電圧が加わり、火花が発生して火災に至ります。

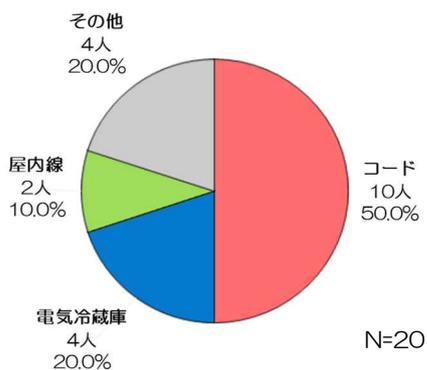


図 1-16 主な電気コード火災等による死者数  
(平成 29 年～令和 3 年)

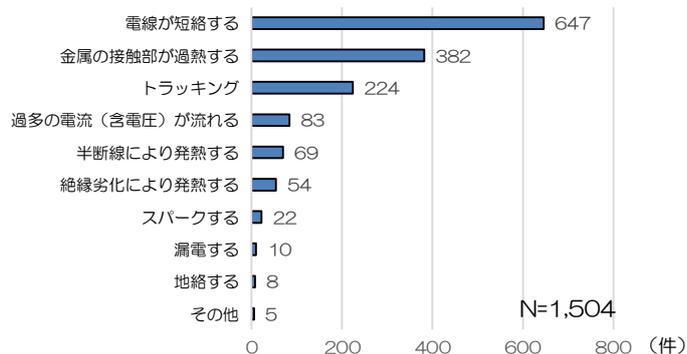


図 1-17 電気コード火災等における主な出火経過  
(平成 29 年～令和 3 年)

## イ 負傷者の発生した火災の出火原因

住宅火災による負傷者は 472 人で、出火原因別で見ると、「こんろ」が 113 人 (23.9%) と最も多く、次いで「たばこ」が 81 人 (17.2%)、「ストーブ」が 41 人 (8.7%) でした（図 1-18）。

また、住宅火災による負傷者の発生率をみると、住宅火災全体 1,617 件中 370 件 (22.9%) で負傷者が発生しました。特に「ロウソク」を出火原因とする住宅火災では 36 件中 17 件 (47.2%) で負傷者が発生しており、負傷者 24 人のうち約 5 割の方が高齢者でした（表 1-11）。

表 1-11 出火原因別負傷者数

出火原因	負傷者数 (高齢者数)	負傷者発生 火災件数	住宅 火災件数	負傷者が生じた 火災発生率
こんろ	113(40)	98	377	26.0%
たばこ	81(28)	61	223	27.4%
ストーブ	41(28)	28	95	29.5%
ロウソク	24(12)	17	36	47.2%
コード	13(5)	9	29	31.0%
放火	8(6)	7	105	6.7%
火遊び	2(0)	2	6	33.3%
その他	142(36)	113	617	18.3%
不明	48(20)	35	129	27.1%
合計	472(175)	370	1,617	22.9%

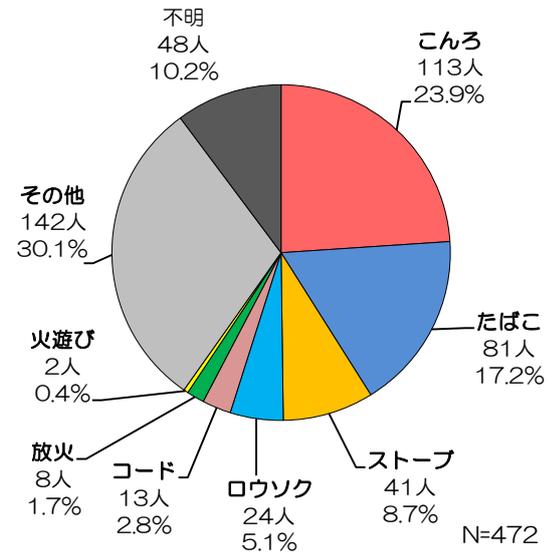
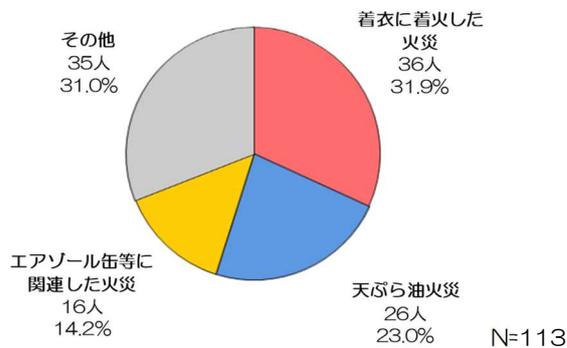


図 1-18 出火原因別負傷者の割合

- ※1 「こんろ」は、ガステーブル等及び電気こんろを合わせたものです。
- 2 「放火」は、放火の疑いを含みます。
- 3 「ストーブ」は、電気、ガス及び石油を合わせたものです。

負傷者が最も多く発生している「こんろ」による負傷の経過をみると、「着衣に着火した火災」が36人(31.9%)と最も多く、次いで「天ぷら油火災」が26人(23.0%)、「エアゾール缶等に関連した火災」が16人(14.2%)でした(図 1-19)。



※天ぷら油火災とは、調理に起因して発生(器具の誤操作等は除く。)し、動植物油から出火して火災(凝固剤関係を含む。)となったものです。

※エアゾール缶等とは、可燃性ガスを噴射剤とした整髪剤や消臭剤等のエアゾール缶と簡易型ガスこんろの燃料として用いられるボンベのことです。ガス抜きをしていたエアゾール缶等の近くで火気を使用したことによる引火や暖房器具の近くにあるエアゾール缶等の加熱によって火災に至ります。

図 1-19 「こんろ」を出火原因とする住宅火災の負傷経過

## (2) 着火物別

### ア 死者が発生した住宅火災の着火物

着火物別の死者発生状況をみると、「くず類」が9人(13.0%)と最も多く、次いで「布団類」及び「衣類・繊維類」が7人(10.1%)でした(表 1-12、図 1-20)。

表 1-12 着火物別死者数

着火物	死者数 (高齢者数)	死者発生 火災件数	住宅 火災件数	死者が生じた 火災発生率
くず類	9(6)	9	210	4.3%
布団類	7(4)	7	134	5.2%
衣類・繊維類	7(6)	6	111	5.4%
内装・建具・ 家具類	2(2)	2	70	2.9%
紙類	1(1)	1	128	0.8%
電線被覆	1(1)	1	23	4.3%
着衣	1(1)	1	47	2.1%
ガソリン等	1(1)	1	10	10.0%
ガス類	1(1)	1	85	1.2%
カーテン・ じゅうたん等	1(1)	1	24	4.2%
天ぷら油	-(-)	-	107	0.0%
その他	5(5)	5	549	0.9%
不明	33(25)	27	119	22.7%
合計	69(54)	62	1,617	3.8%

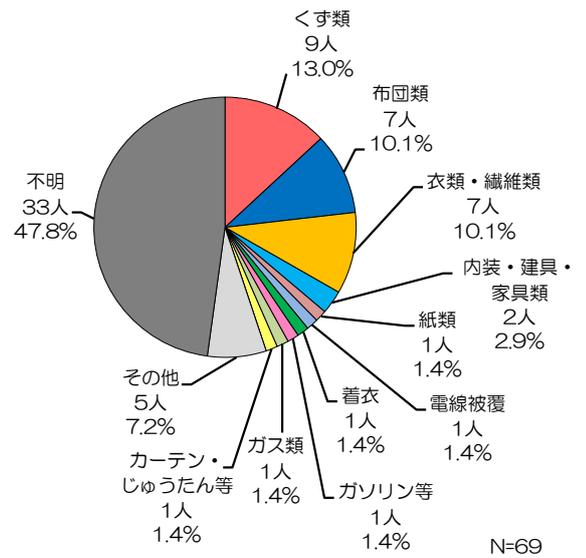


図 1-20 着火物別死者の割合

イ 負傷者が発生した住宅火災の着火物

着火物別の負傷者の発生状況をみると、「布団類」が60人（12.7%）と最も多く、次いで「ガス類」が49人（10.4%）、「紙類」が44人（9.3%）と続いています（表 1-13、図 1-21）。

表 1-13 着火物別負傷者数

着火物	負傷者数 (高齢者数)	負傷者発生 火災件数	住宅 火災件数	負傷者が生じた 火災発生率
布団類	60(23)	45	134	33.6%
ガス類	49(13)	43	85	50.6%
紙類	44(20)	32	128	25.0%
着衣	42(24)	40	47	85.1%
衣類・繊維類	39(21)	28	111	25.2%
くず類	33(7)	30	210	14.3%
天ぷら油	32(5)	26	107	24.3%
内装・建具・ 家具類	16(6)	10	70	14.3%
カーテン・ じゅうたん等	6(1)	4	24	16.7%
電線被覆	3(0)	3	23	13.0%
ガソリン等	3(2)	2	10	20.0%
その他	87(26)	68	549	12.4%
不明	58(27)	39	119	32.8%
合計	472(175)	370	1,617	22.9%

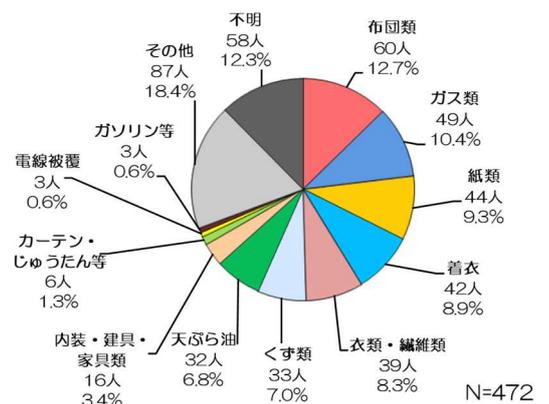


図 1-21 着火物別負傷者の割合

## ウ 着火物と出火原因

最も多くの死傷者が発生した住宅火災の着火物は「布団類」でした。「布団類」に着火した住宅火災件数は134件で、そのうち「たばこ」を出火原因とした火災が60件（44.8%）と最も多くなっています。「たばこ」を出火原因として「布団類」に着火した住宅火災60件において、31人の死傷者が発生し、このうち死者が4人、重篤の負傷者が3人、重症の負傷者が3人、中等症の負傷者が7人でした（図1-22）。

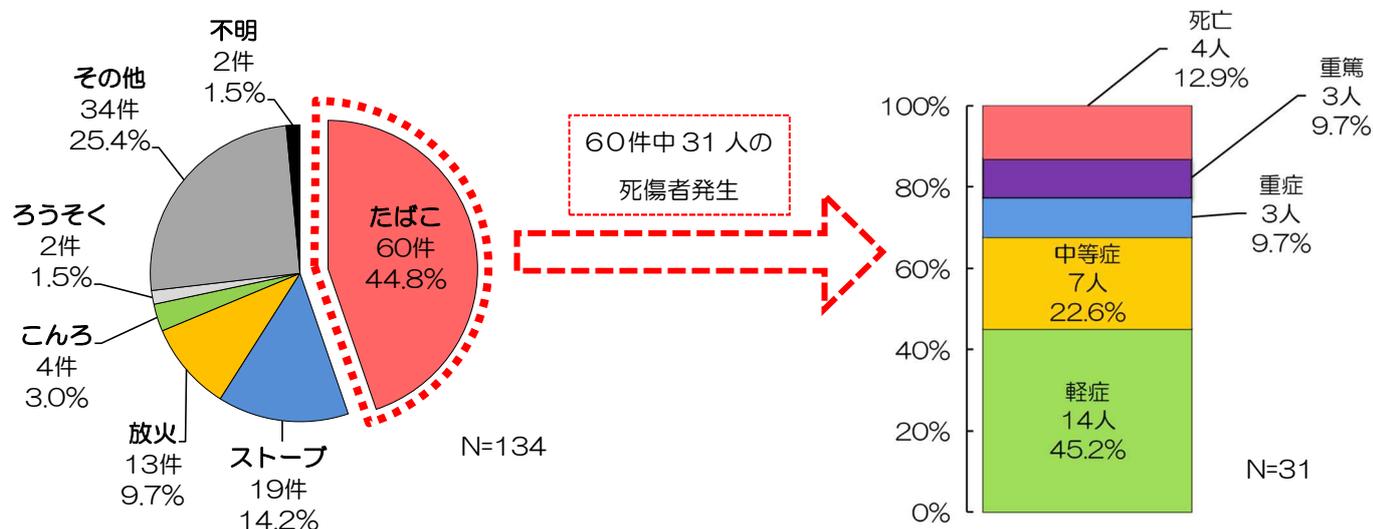


図 1-22 布団類への着火による住宅火災の出火原因別火災件数とたばこによる死傷者数の内訳

「たばこ」を出火原因として「布団類」に着火した住宅火災による死傷者31人を、死傷程度別の年齢構成でみると、全体として高齢者12人に対して高齢者以外は19人となっており、高齢者以外の死傷者の方が多くなっています。ただし、高齢者は5割が重症以上となり、死傷の程度が重くなっています（図1-23）。

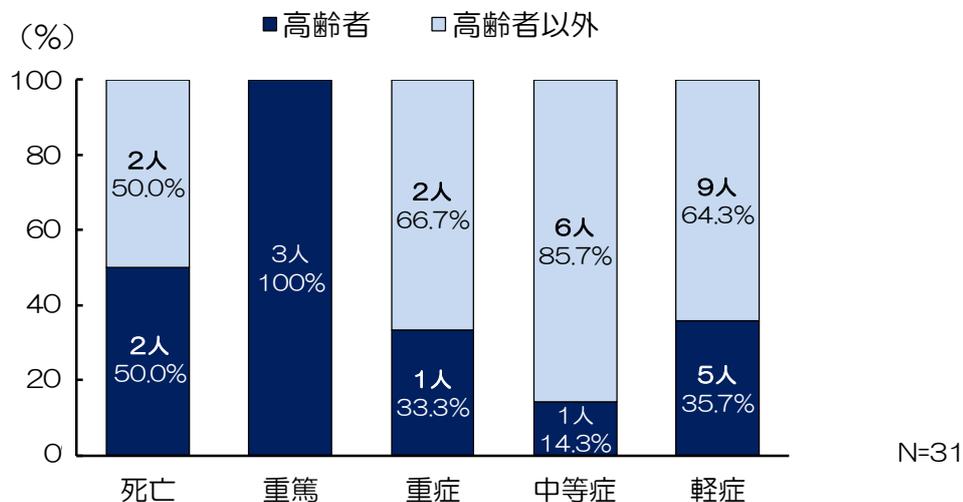


図 1-23 たばこを出火原因として布団類に着火した住宅火災における死傷者の年齢構成

### (3) 出火箇所別

#### ア 死者が発生した住宅火災の出火箇所

出火箇所別の死者発生状況を見ると、「居室等」が53人（76.8%）と最も多く、次いで「台所・キッチン等」が13人（18.8%）となっており、「居室等」と「台所・キッチン等」を合わせると9割以上を占めています（表 1-14、図 1-24）。

表 1-14 出火箇所別死者数

出火箇所	死者数 (高齢者数)	死者発生 火災件数	住宅 火災件数	死者が生じた 火災発生率
居室等	53(41)	49	682	7.2%
台所・ キッチン等	13(11)	12	638	1.9%
車庫・ 駐車場等	3(2)	1	10	10.0%
ベランダ	-(-)	-	82	0.0%
便所・洗面所 ・浴室等	-(-)	-	67	0.0%
廊下・階段等	-(-)	-	48	0.0%
玄関・ホール	-(-)	-	27	0.0%
建築物の 外周部	-(-)	-	6	0.0%
その他	-(-)	-	55	0.0%
不明	-(-)	-	2	0.0%
合計	69(54)	62	1,617	3.8%

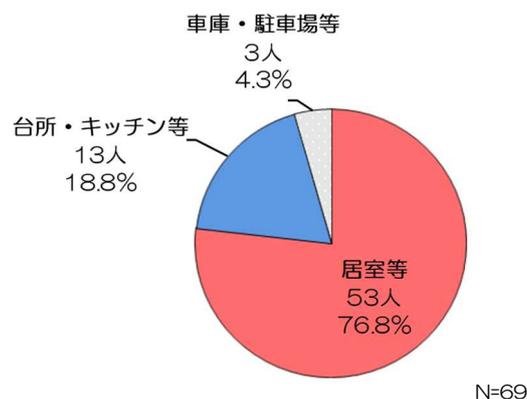


図 1-24 出火箇所別死者の割合

#### イ 負傷者が発生した住宅火災の出火箇所

出火箇所別の負傷者の発生状況を見ると、「居室等」が262人（55.5%）と最も多く、次いで「台所・キッチン等」が163人（34.5%）となっており、「居室等」と「台所・キッチン等」を合わせると9割を占めています（表 1-15、図 1-25）。

表 1-15 出火箇所別負傷者数

出火箇所	負傷者数 (高齢者数)	負傷者発生 火災件数	住宅 火災件数	負傷者が生じた 火災発生率
居室等	262(104)	192	682	28.2%
台所・ キッチン等	163(53)	141	638	22.1%
ベランダ	17(4)	14	82	17.1%
便所・洗面所 ・浴室等	12(4)	9	67	13.4%
廊下・階段等	5(3)	4	48	8.3%
玄関・ホール	3(2)	2	27	7.4%
建築物の 外周部	-(-)	-	6	0.0%
車庫・ 駐車場等	-(-)	-	10	0.0%
その他	9(5)	7	55	12.7%
不明	1(-)	1	2	50.0%
合計	472(175)	370	1,617	22.9%

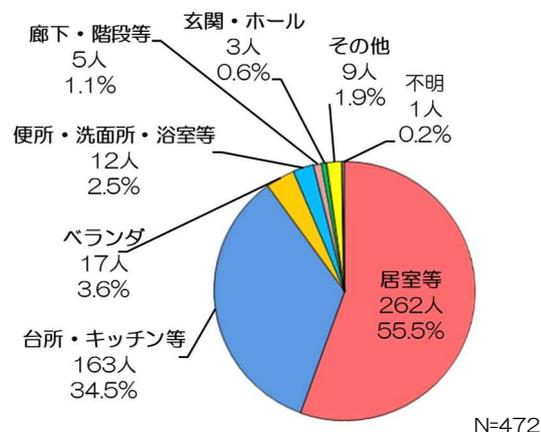


図 1-25 出火箇所別負傷者の割合

#### (4) 月別・時間帯別

##### ア 月別の住宅火災による死傷者発生状況

月別に死者発生状況をみると、1月と12月が13人、次いで11月が8人の順で多く発生しました。

月別に負傷者発生状況をみると、12月が67人、次いで1月、2月及び3月がそれぞれ49人の順で多く発生しました。

月別の住宅火災件数、死者数及び負傷者数は、いずれも火災多発期（12月1日から3月31日まで間）の期間中あるいはその前後の期間で多く発生していることが分かります（表1-16、図1-26）。

表 1-16 月別死傷者発生状況

出火月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
死者数	13	5	6	7	2	5	4	3	2	1	8	13	69
死者発生率※1	5.7%	3.1%	4.0%	4.6%	1.6%	3.7%	2.7%	2.0%	2.3%	0.8%	5.8%	6.3%	3.8%
高齢者死者数	10	5	3	4	2	3	4	3	2	1	7	10	54
負傷者数	49	49	49	45	39	36	26	24	21	26	41	67	472
負傷者発生率※2	21.4%	23.3%	22.1%	23.0%	24.6%	25.0%	18.0%	23.2%	19.3%	19.2%	23.0%	29.3%	22.9%
高齢者負傷者数	23	17	19	16	11	12	10	9	3	8	19	28	175
住宅火災件数	192	159	149	152	126	108	111	99	88	120	139	174	1,617
死者発生住宅火災件数	11	5	6	7	2	4	3	2	2	1	8	11	62
負傷者発生住宅火災件数	41	37	33	35	31	27	20	23	17	23	32	51	370

※1 死者発生率＝死者発生住宅火災件数／住宅火災件数

※2 負傷者発生率＝負傷者発生住宅火災件数／住宅火災件数

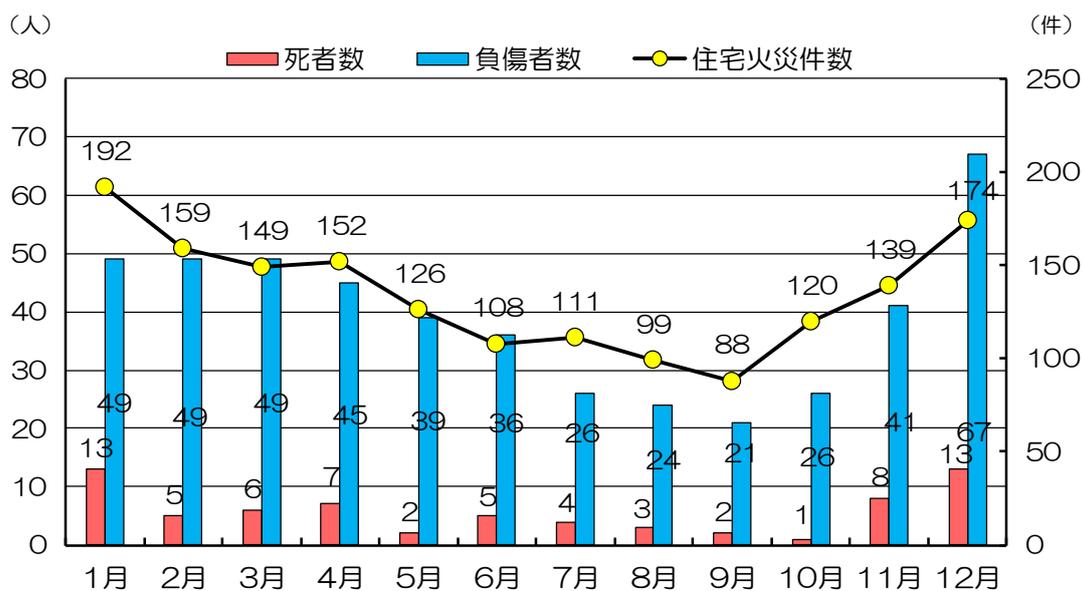


図 1-26 月別の住宅火災件数と死傷者数

## イ 時間帯別の住宅火災による死傷者発生状況

時間帯別（不明を除く。）に死者の発生状況をみると、時間帯に関係なく死者が発生しました。特に、0時から1時台までの時間帯は、死者発生率が高くなっています。

時間帯別（不明を除く。）に負傷者の発生状況をみると、時間帯に関係なく負傷者は発生していますが、6時から7時台、12時から13時台、18時から21時台まで等、火気の取り扱いが増加する食事時間帯や夜間帯に負傷者が多く発生しています（表 1-17、図 1-27）。

表 1-17 時間帯別死傷者発生状況

出火時間帯	0 ～ 1	2 ～ 3	4 ～ 5	6 ～ 7	8 ～ 9	10 ～ 11	12 ～ 13	14 ～ 15	16 ～ 17	18 ～ 19	20 ～ 21	22 ～ 23	不明	合計
死者数	12	3	3	6	2	9	4	6	3	5	10	5	1	69
死者発生率※1	9.4%	5.0%	4.5%	4.5%	1.8%	5.0%	2.8%	4.2%	1.4%	2.6%	5.6%	4.2%	0.8%	3.8%
高齢者死者数	10	3	3	4	2	6	2	4	3	5	8	3	1	54
負傷者数	43	30	28	52	35	32	42	31	38	43	52	43	3	472
負傷者発生率※2	32.1%	31.7%	28.4%	33.0%	27.5%	16.5%	24.1%	21.7%	22.0%	19.5%	25.1%	25.8%	2.3%	23.1%
高齢者負傷者数	11	7	13	22	16	20	23	12	13	12	11	13	2	175
住宅火災件数	106	60	67	112	109	139	145	120	141	190	179	120	129	1,617
死者発生住宅火災件数	10	3	3	5	2	7	4	5	2	5	10	5	1	62
負傷者発生住宅火災件数	34	19	19	37	30	23	35	26	31	37	45	31	3	370

※1 死者発生率＝死者発生住宅火災件数／住宅火災件数

※2 負傷者発生率＝負傷者発生住宅火災件数／住宅火災件数

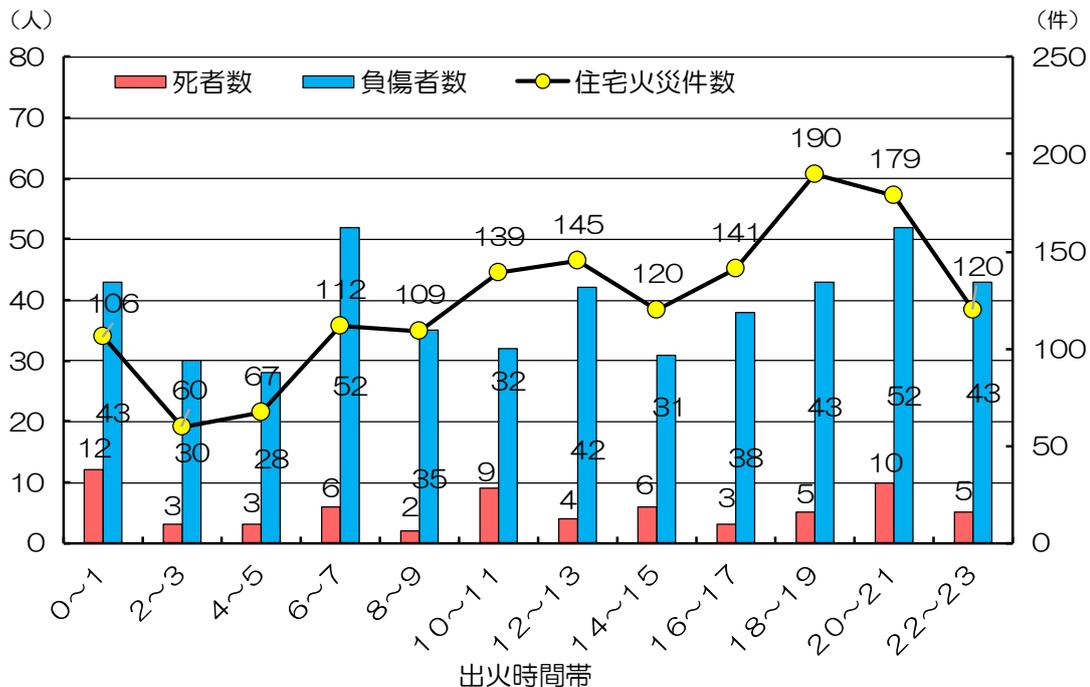


図 1-27 時間帯別の住宅火災件数と死傷者数

(5) 年齢別・性別

ア 年齢別の住宅火災による死者発生状況

年齢別に住宅火災による死者発生状況をみると、令和3年中の住宅火災による死者数は69人であり、このうち65歳以上の高齢者が54人(78.3%)と全体の約8割を占めています。65歳以上75歳未満の前期高齢者が15人で、75歳以上の後期高齢者が39人であり、後期高齢者の方が多くなっています。

火災焼損程度別で死者発生状況をみると、全焼で22人、半焼で15人、部分焼で31人、ぼやで1人でした。焼損被害が比較的少ない部分焼やぼやの火災においても死者が発生しています(表1-18、図1-28)。

イ 性別の住宅火災による死者発生状況

性別で死者発生状況をみると、男性が34人(49.3%)、女性が35人(50.7%)となっています。このうち、高齢者については、男性が25人(73.5%)、女性が29人(82.9%)となっています(表1-18、図1-28)。

表1-18 年齢別死者発生状況

年齢別	死者数	火災焼損程度				性別	
		全焼	半焼	部分焼	ぼや	男性	女性
高齢者以外	0～5	-	-	-	-	-	-
	6～9	-	-	-	-	-	-
	10～19	-	-	-	-	-	-
	20～29	-	-	-	-	-	-
	30～39	-	-	-	-	-	-
	40～49	4	-	1	3	2	2
	50～59	6	3	-	3	4	2
	60～64	5	2	1	2	3	2
前期高齢者	65～69	6	2	1	3	4	2
	70～74	9	1	4	3	6	3
後期高齢者	75～79	10	3	3	4	1	9
	80～89	22	8	5	9	11	11
	90～	7	3	-	4	3	4
合計	69	22	15	31	1	34	35

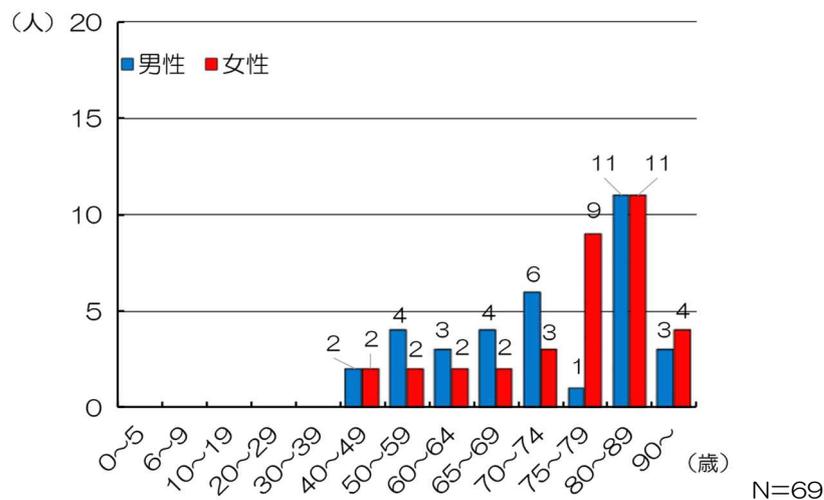


図1-28 年齢別・男女別死者発生状況

## (6) 世帯構成別

住宅火災が発生した世帯の構成を、「一人暮らし（高齢者を除く。）」、「高齢者を含む家族」、「高齢者夫婦のみ」及び「高齢者一人暮らし」に分けます。このうち、「高齢者一人暮らし」と「高齢者夫婦のみ」の世帯を合わせて「高齢者のみの世帯」と呼びます。

世帯構成別に住宅火災による死者発生状況を見ると、「高齢者一人暮らし」世帯で最も多く、住宅火災による死者のうち約6割が「高齢者のみの世帯」で発生しました。過去5年間の「高齢者のみの世帯」での住宅火災による死者は5割前後で推移しています（図1-29）。

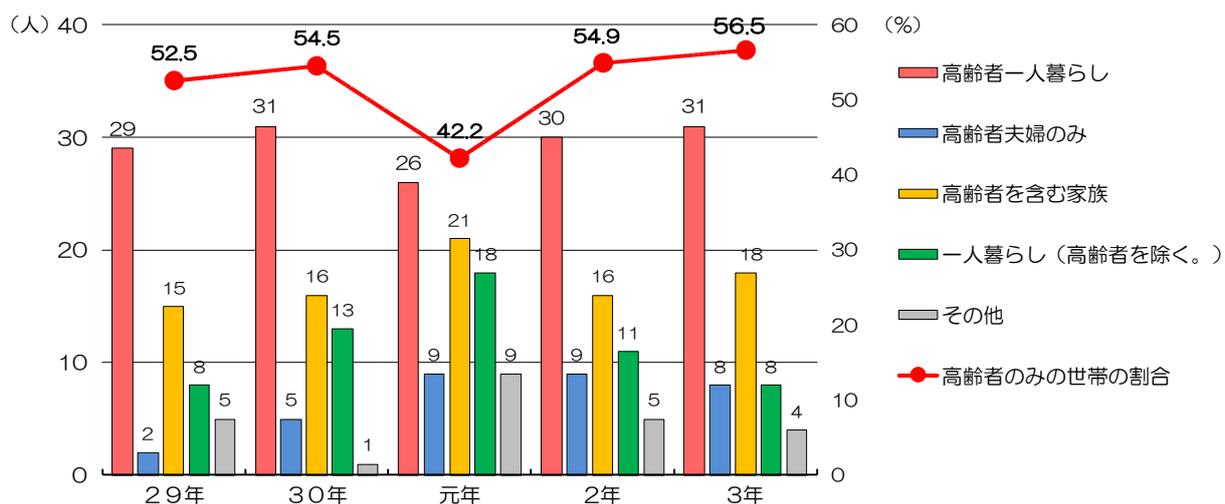


図1-29 過去5年間における世帯構成別の住宅火災による死者発生状況

## (7) 住宅火災時の行為別

### ア 行為別の住宅火災による死者発生状況

住宅火災時の行為別に死者発生状況を見ると、死者69人のうち、「就寝中」が8人(11.6%)と最も多く、次いで「飲食中」が2人(2.9%)、「休憩中」が2人(2.9%)、避難中が2人(2.9%)と続きます(表1-19)。

死者が発生した「就寝中」には、寝たばこと推定されるものも含まれます。布団等に落ちたたばこは、しばらく無炎燃焼(炎を出さずに燃え広がること)を続け、気付いた時には室内に一酸化炭素等の有毒ガスが充満して、避難行動がとれずに命を落とす危険があります。

### イ 行為別の住宅火災による負傷者発生状況

住宅火災時の行為別に負傷者発生状況を見ると、負傷者472人のうち、「初期消火中」が130人(27.5%)と最も多く、次いで「家事従業中」が72人(15.3%)、「就寝中」が54人(11.4%)と続きます(表1-20)。

負傷者が最も多く発生した「初期消火中」は、初期消火の際に火炎のあおりや煙の吸い込み等により負傷したものです。

表 1-19 死者の行為状態

住宅火災時の 行為	死者数 (高齢者数)	割合
就寝中	8(4)	11.6%
飲食中	2(2)	2.9%
休憩中	2(2)	2.9%
避難中	2(2)	2.9%
初期消火中	1(1)	1.4%
救助中	1(1)	1.4%
家事従事中	-(-)	0.0%
火災通報中	-(-)	0.0%
その他	1(1)	1.4%
不明	52(41)	75.4%
合計	69(54)	100.0%

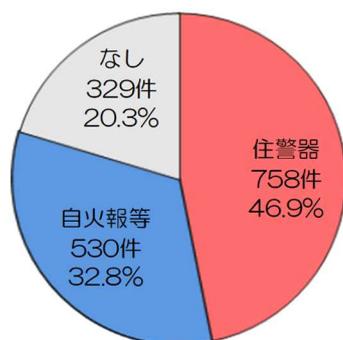
表 1-20 負傷者の行為状態

住宅火災時の 行為	負傷者数 (高齢者数)	割合
初期消火中	130(34)	27.5%
家事従業中	72(35)	15.3%
避難中	58(21)	12.3%
就寝中	54(25)	11.4%
休憩中	38(13)	8.1%
作業中	32(11)	6.8%
飲食中	4(1)	0.8%
救助中	4(1)	0.8%
採暖中	1(1)	0.2%
火災通報中	1(0)	0.2%
火遊び中	1(0)	0.2%
見物中	-(-)	0.0%
その他	40(16)	8.5%
不明	37(17)	7.8%
合計	472(175)	100.0%

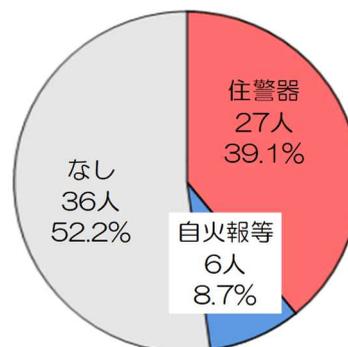
## 4 住宅用火災警報器等の概要

### (1) 住宅用火災警報器等の設置状況

住宅火災 1,617 件と住宅火災による死者 69 人(自損を除く。)を住宅用火災警報器等の設置有無別にみると、住宅用火災警報器(以下「住警器」という。)が設置されていた住宅火災は 758 件(46.9%)、死者は 27 人(39.1%)でした。自動火災報知設備等(以下「自火報等」という。)が設置されていた住宅火災は 530 件(32.8%)、死者は 6 人(8.7%)でした。住警器等(住警器及び自火報等をいう。)が未設置(設置不明を含む。)だった住宅火災は 329 件(20.3%)、死者は 36 人(52.2%)でした(図 1-30、図 1-31)。



N=1,617



N=69

図 1-30 住警器等設置状況別住宅火災件数

図 1-31 住警器等設置状況別死者数

住警器等設置状況別に死者及び負傷者が発生した住宅火災件数をみると、住警器等設置の住宅火災件数は 1,288 件あり、このうち死者発生件数(死者及び負傷者の両方が発生した火災を含む。)が 31 件(2.4%)、負傷者のみの発生件数が 265 件(20.6%)でした。

一方、住警器等未設置の住宅火災件数は 329 件あり、死者発生件数が 31 件(9.4%)、負傷者のみの発生件数が 87 件(26.4%)でした。

以上のことから、住警器等未設置の方が、死傷者が発生する件数の割合が高いことが分かります(図 1-32)。

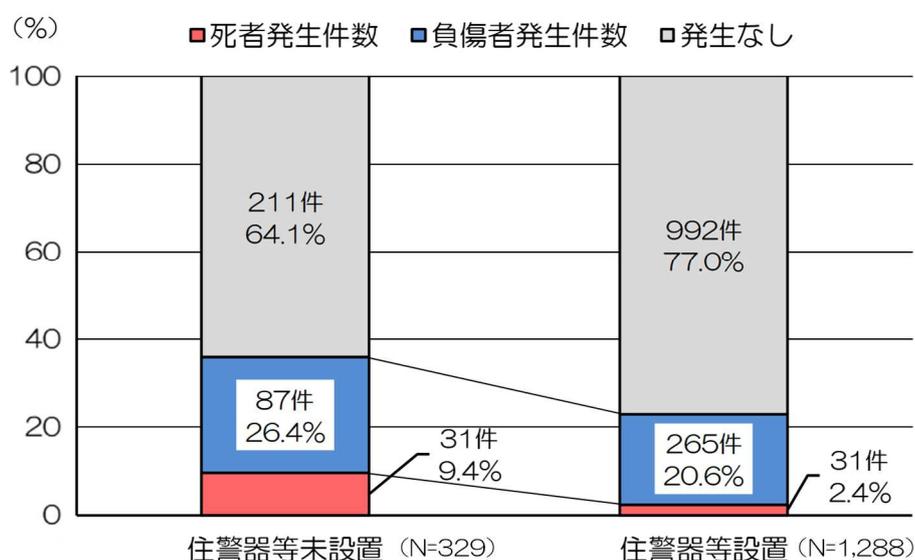


図 1-32 住警器等設置状況別の死者及び負傷者が発生した住宅火災件数

## (2) 住警器等設置有無別の比較

住警器等設置住宅における火災と住警器等未設置住宅における火災について比較してみると、火災 1 件あたりの平均焼損床面積について、住警器等未設置住宅では 18.2 m<sup>2</sup>であるのに対し、設置住宅では約 1/5 の 3.9 m<sup>2</sup>となっています。火災 1 件あたりの平均損害額については、住警器等未設置住宅では 309 万円であるのに対し、設置住宅では約 1/4 の 83 万円となっています。火災 100 件あたりの死者発生火災件数については、住警器等未設置住宅では 9.4 件であるのに対し、設置住宅では約 1/4 の 2.4 件となっています。

以上のことから、住警器等の設置は火災の被害軽減に効果的であることが分かります（図 1-33～図 1-35）。

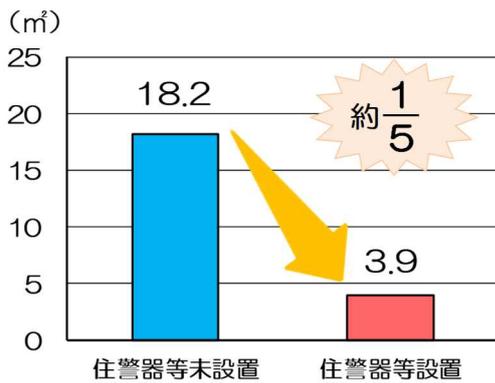


図 1-33 住警器等設置有無別の火災 1 件あたりの平均焼損床面積の比較

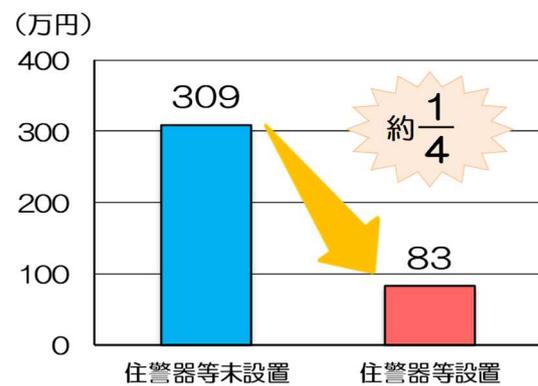


図 1-34 住警器等設置有無別の火災 1 件あたりの平均損害額の比較

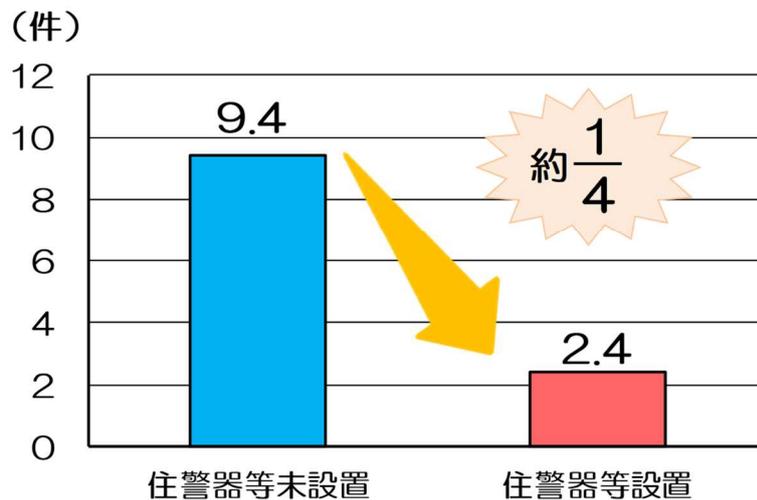


図 1-35 住警器等設置有無別の火災 100 件あたりの死者発生火災件数の比較

### (3) 住警器の全部設置・一部設置の比較

住警器が設置されていた住宅火災 758 件のうち、火災予防条例で定められたとおりに全ての居室、台所、階段に設置されている住宅（以下「全部設置」という。）と、一部のみに設置されている住宅（以下「一部設置」という。）を比較すると、全部設置が 591 件（78.0%）、一部設置が 167 件（22.0%）でした。

火災焼損程度別にみると、全部設置だった火災 591 件中、全焼及び半焼は計 21 件（3.6%）に対し、一部設置だった火災 167 件中、全焼及び半焼は計 24 件（14.4%）でした（図 1-36、図 1-37）。

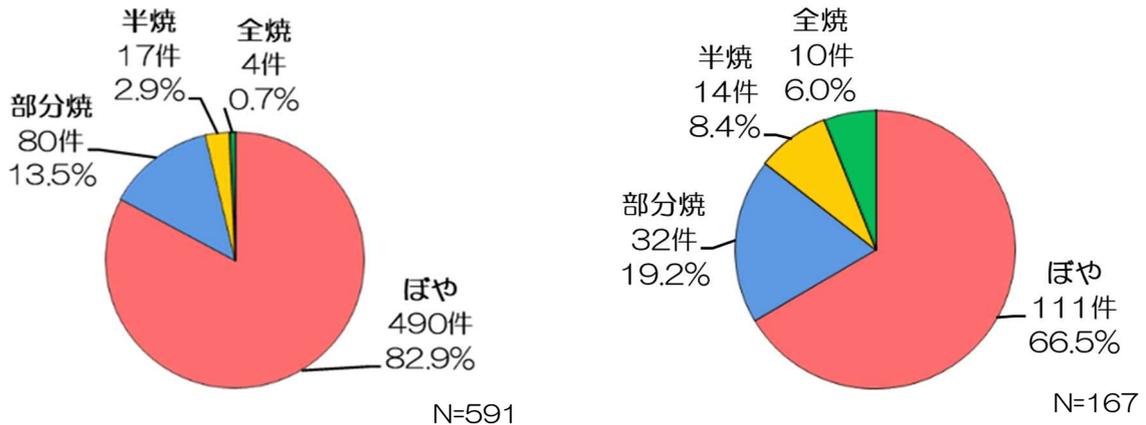


図 1-36 住警器全部設置住宅の火災焼損程度 図 1-37 住警器一部設置住宅の火災焼損程度

住警器の全部設置と一部設置の設置状況別に死者発生火災件数を比較すると、全部設置では 591 件中 14 件で死者が発生しており、一部設置では 167 件中 11 件で死者が発生しました。

住宅火災 100 件あたりの死者発生火災件数で比較すると、一部設置では 6.6 件に対して、全部設置では 2.4 件となり、全部設置の住宅で死者発生火災件数が約 1/3 となっています（図 1-38）。

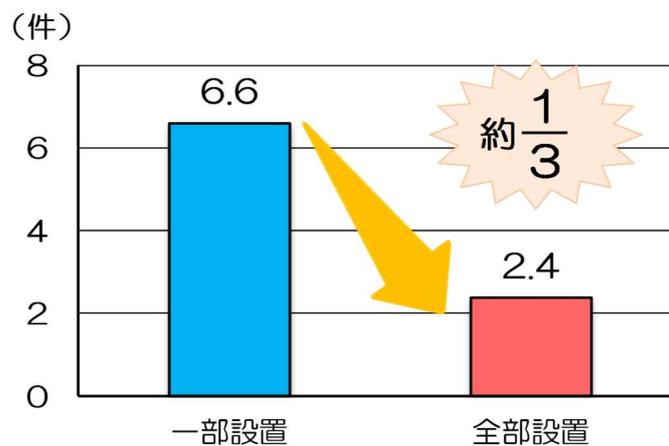


図 1-38 住警器設置状況別火災 100 件あたりの死者発生火災件数

#### (4) 奏功事例の内訳

消防に関する世論調査（令和3年）によると、東京消防庁管内の住警器等設置率は87.8%となっています。

令和3年中、住警器の作動により火災の被害を軽減した奏功事例は284件で、火災焼損程度別にみると、ぼやが225件(79.2%)と約8割を占めています（図1-39）。

また、住警器の奏功事例を出火箇所別にみると、居室等は130件（45.8%）、台所・キッチン等が130件（45.8%）で、これらを合わせると9割以上を占めています（図1-40）。

なお、住警器の鳴動は、隣人や通行人等、居住者以外にも気付かれており、火災の早期発見、被害の軽減につながり、火災に至らなかった事例も多数あります。

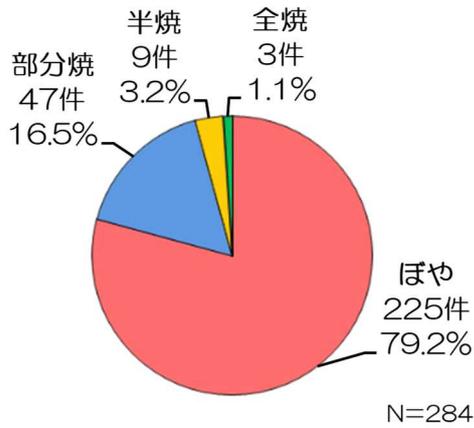


図1-39 火災焼損程度別の奏功事例

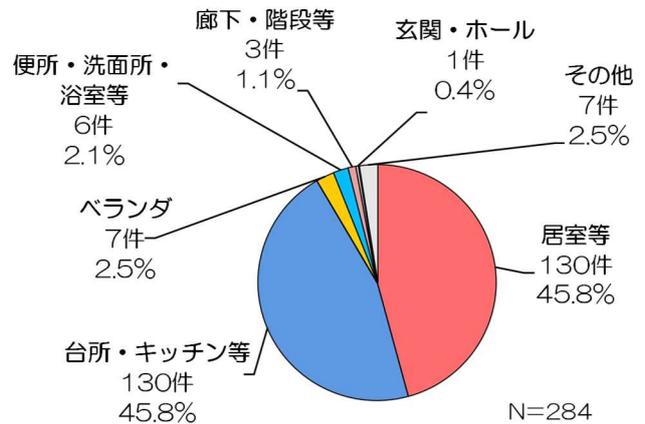
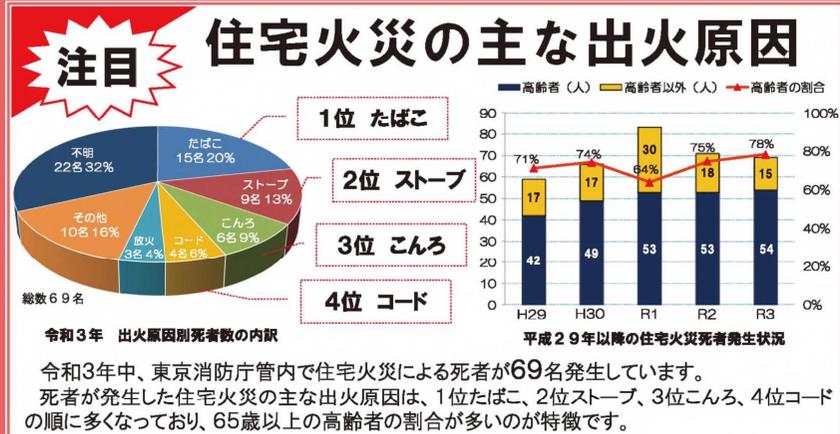


図1-40 出火箇所別の奏功事例

## 5 住宅火災から身の安全を守るためにできること



令和3年中、東京消防庁管内で住宅火災による死者が69名発生しています。死者が発生した住宅火災の主な出火原因は、1位たばこ、2位ストーブ、3位こんろ、4位コードの順に多くなっており、65歳以上の高齢者の割合が多いのが特徴です。

### 思わぬところに原因が… 住宅火災ここに注意！

<h4>たばこ</h4> <p><b>死者発生原因第1位！</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>寝たばこは絶対にしない</li> <li>飲酒→喫煙→うたた寝に注意する</li> <li>吸殻を灰皿にためない</li> <li>吸殻は水で完全に消してから捨てる</li> <li>火種を落とさないよう安全な場所で喫煙する</li> </ul>	<h4>こんろ</h4> <p><b>調理中の使用放置や着衣への着火に注意！</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>調理中に離れない</li> <li>周囲に燃えやすいものを置かない</li> <li>防災品のエプロンやアームカバーを使用する</li> <li>火が鍋底からはみ出さないように調節する</li> <li>安全機能(Siセンサー)付きこんろを使用する</li> </ul>
<h4>ストーブ</h4> <p><b>ストーブの中で最も多いのは、電気ストーブ！</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>周囲に燃えやすいものを置かない</li> <li>外出時や就寝時は必ず消す</li> <li>給油は必ず消してから行う</li> <li>ストーブの近くで洗濯物を干かさない</li> </ul>	<h4>コード</h4> <p><b>身近に潜み、知らぬ間に出火！</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>使っていないプラグは抜いておく</li> <li>プラグ、コンセントは定期的に掃除する</li> <li>家具などの下敷き、折れ曲がりに注意する</li> <li>タップは決められた容量内で使用する</li> <li>束ねて使用しない</li> </ul>

日々の「気づかい」と「備え」で住宅火災を防ぎましょう！

### いま、備えよう 防災品

～こちらのマークが目印です～

左：防災品 右：非防災品  
同時刻に着火し、1分後の燃焼状況の違い。  
非防災品は数秒で燃え広がるが、防災品は燃え広がりにくい。

提供：日本防災協会

防災品を使うことで、**火災の発生を防止し延焼を抑えることができます。**

家庭で使用する主な防災品

- アームカバー
- エプロン
- カーテン
- 寝具類
- じゅうたん

### いま、備えよう 消火器

～火を使う場所に備えましょう～

消火器による初期消火は、火災の被害軽減や抑制に効果的です。

一般住宅向けの小型で軽量の住宅用消火器や、片手でも使用できるエアゾール式消火具もあります。

**初期消火のポイント**

- ① 自身に危険が及ばない範囲で消火を行いましょう。危険を感じたら、すぐ避難しましょう。
- ② 消火剤は燃えているものに向けて噴射しましょう。
- ③ 消火剤は最後まで使い切りましょう。

### いま、備えよう 住宅用火災警報器 ～定期的な点検・交換を～

住宅用火災警報器は、煙や熱を感知し、音声や警報音で火災の発生を知らせ、住宅火災の**早期発見、被害の軽減**に役立っています。

- 設置場所は、全ての居室・台所・階段です。
- 定期的に(少なくとも半年に1回以上)点検をしましょう。
- **設置後10年を経過したものは電子部品の劣化等により、火災を感知しなくなるおそれがありますので、機器本体を交換しましょう。**

日常の維持管理も大切！点検方法はこちら

ボタンを押す  
または  
ひもを引く

正常に作動する場合は、音声や警報音でお知らせします。

悪質な訪問販売に十分注意しましょう！

## 第2章 放火火災の実態

### 1 放火火災の概要

令和3年中の総火災件数 3,939 件のうち放火（放火の疑いを含む。）火災は 590 件でした。放火火災件数は減少傾向にあり、令和3年中の総火災件数に占める放火の割合は過去10年で最も低くなりました（図2-1）。

放火火災 590 件の内訳は、その他火災 364 件（61.7%）、建物火災 213 件（36.1%）、車両火災 12 件（2.0%）、林野火災 1 件（0.2%）でした。

※ 治外法権及び管外からの延焼火災は、総火災件数のみ計上しています。

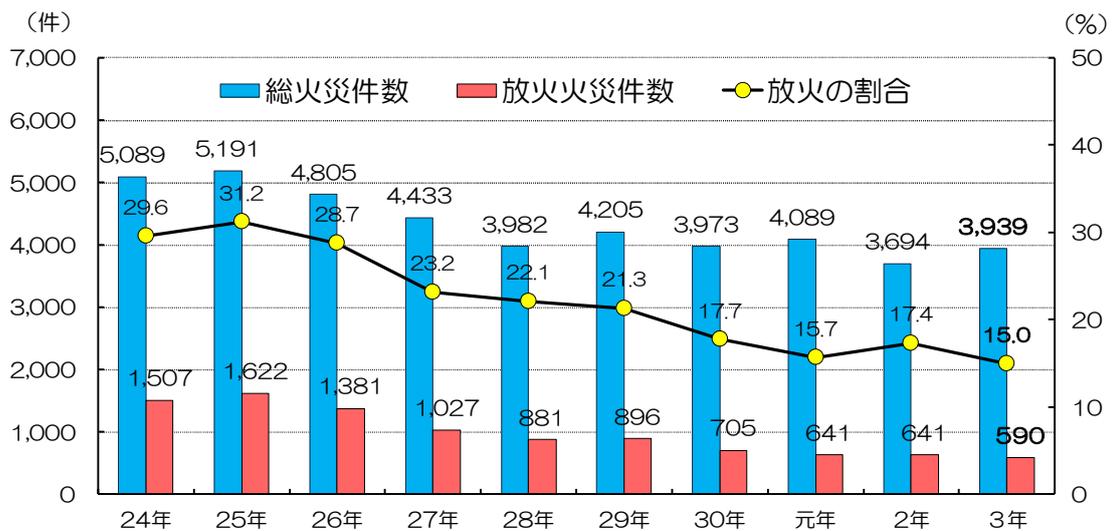


図2-1 過去10年間における放火火災件数の推移

### 2 放火火災の発生状況

#### (1) 月別発生状況

放火火災の発生状況を月別にみると、2月から4月にかけて放火火災が多く発生し、放火の割合も高くなっています（図2-2）。

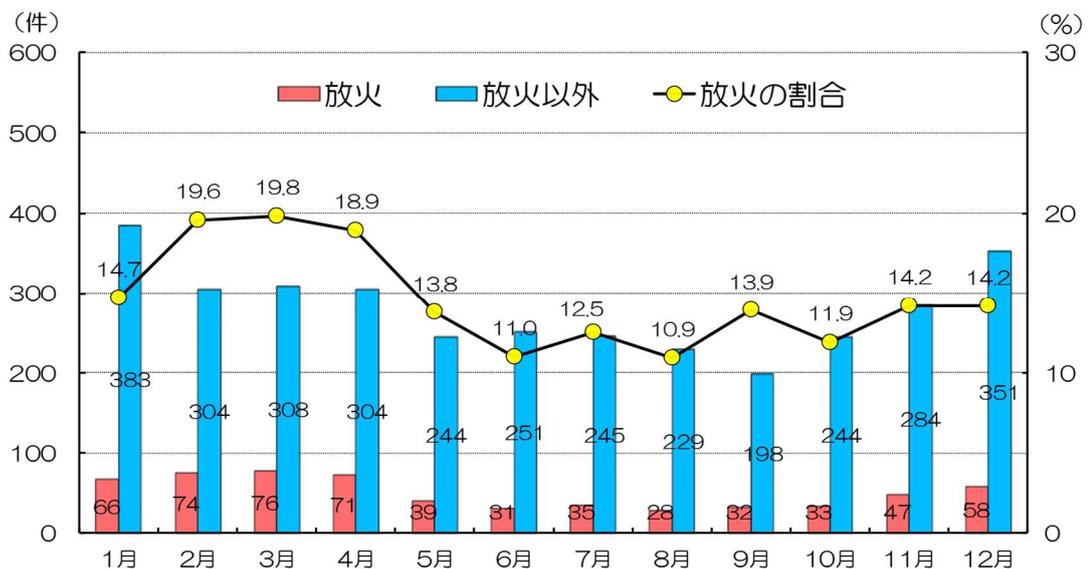


図2-2 月別の放火火災発生状況

## (2) 曜日別発生状況

曜日別に放火火災の発生状況を見ると、日曜日においては、放火火災が少なく放火の割合についても若干低くなっていますが、その他の曜日においては、若干の上下はあるものの一様に発生しています（図 2-3）。

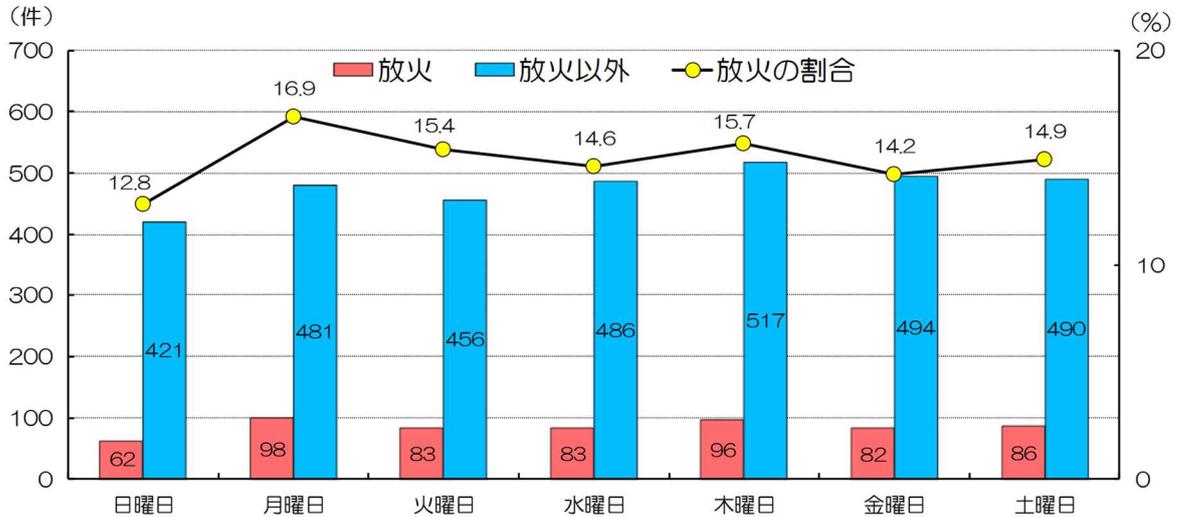


図 2-3 曜日別の放火火災発生状況

## (3) 時間帯別発生状況

出火時間が不明であった 169 件を除いた 421 件の放火火災を時間帯別にみると、18 時から 1 時台までの間に放火火災が多く発生しており、0 時から 5 時台までの間に放火の割合が高いことがわかります（図 2-4）。

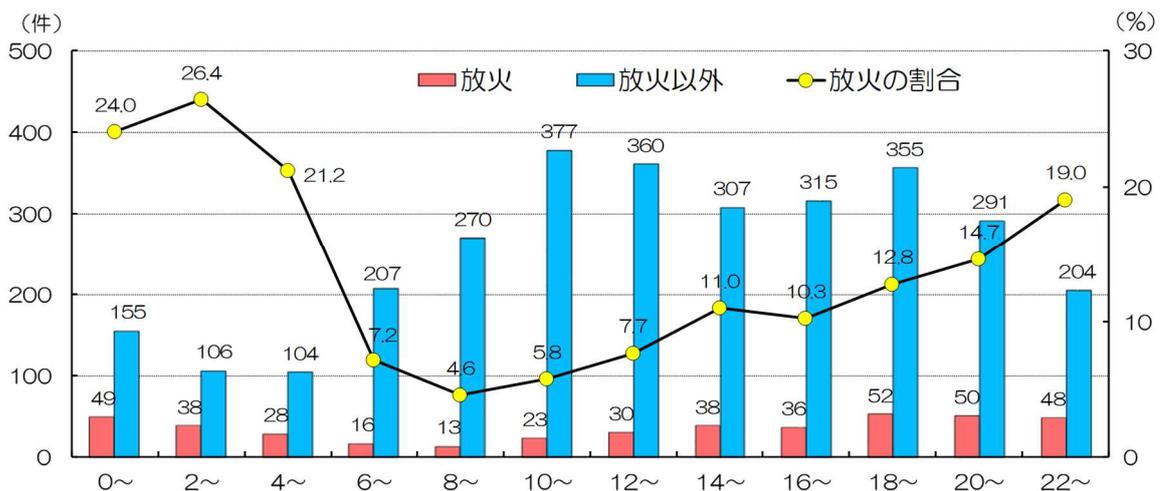


図 2-4 時間帯別の放火火災発生状況

#### (4) 連続放火火災の発生状況

令和3年中、同一日とその翌日までに、同一地域内で5件以上放火された連続放火火災は3回発生しました(表2-1)。

表2-1 主な連続放火火災の発生状況

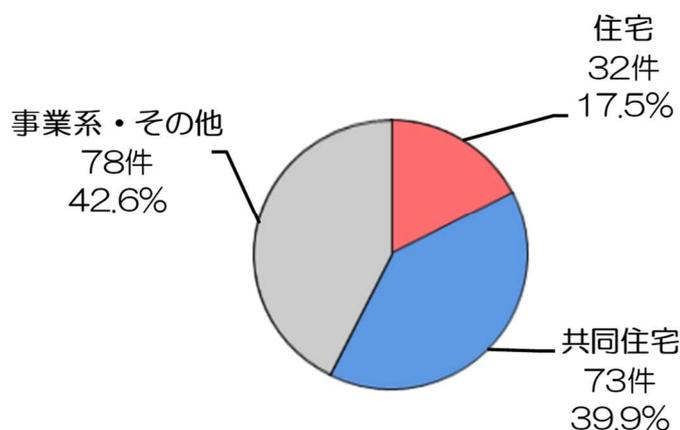
発生月	区市町村	出火箇所	焼損物件	連続件数
1月	江戸川区	公園、敷地内、 屋外ごみ捨場	ごみ等	6
2月	板橋区	敷地内、建物の外周部、 廊下	紙くず等	5
3月	港区	公園	カード等	6

(5) 主な火元建物用途別の発生状況

放火火災 590 件のうち、建物から出火した放火火災 183 件を主な建物用途別にみると、住宅 32 件（17.5%）、共同住宅 73 件（39.9%）、事業系・その他 78 件（42.6%）となっており、5 割以上が住宅及び共同住宅から発生しました（表 2-2、図 2-5）。

表 2-2 火元建物用途別発生状況

火元用途		放 火	建物から 出火した火災	放 火 件 数 / 火 災 件 数
居 住 系	住 宅	32	600	5.3%
	共 同 住 宅	73	1,017	7.2%
事 業 系	事 務 所	21	242	8.7%
	停 車 場	4	25	16.0%
	倉 庫	4	20	20.0%
	飲 食 店	3	288	1.0%
	病 院 等	2	26	7.7%
	学 校	2	24	8.3%
	百 貨 店 ・ 物 販 等	1	117	0.9%
	作 業 所	-	74	0.0%
	ホ テ ル ・ 簡 易 宿 泊 所	-	26	0.0%
	そ の 他	6	60	10.0%
そ の 他	共 用 部 分	24	139	17.3%
	付 属 建 物 等	5	19	26.3%
	空 家	3	11	27.3%
	そ の 他	3	32	9.4%
合 計		183	2,720	6.7%



N=183

図 2-5 建物から出火した放火火災内訳

## (6) 主な放火場所と着火物

主な放火場所別にみると、放火火災に占める建物関係（主として建物の箇所）は 197 件（33.4%）と約 3 割を占めています。

建物関係 197 件のうち、最も多い放火場所は共用部分 74 件（37.6%）であり、次いで住宅部分 59 件（29.9%）と、これら 2 つを合わせると約 7 割を占めています。

放火火災に占める建物関係以外（主として建物以外の箇所）は 393 件（66.6%）発生し、敷地内 161 件（41.0%）、公園・墓地 105 件（26.7%）、道路 43 件（10.9%）等でした。

放火火災 590 件を着火物別にみると、「ごみくず」、「紙・紙製品類」、「合成樹脂製品等」の順で多く発生しました（表 2-3）。

表 2-3 主な放火場所と着火物

放火場所	着火物	ごみくず	紙・紙製品類	合成樹脂製品等	枯草	繊維類	くず類	車両関係	その他	不明	合計
建物関係	共用部分	6	36	16	-	4	5	-	5	2	74
	住宅部分	2	15	1	-	21	1	-	12	7	59
	建物の外周部	1	1	6	1	-	2	-	3	-	14
	物置・倉庫	5	3	-	-	-	-	-	2	-	10
	バルコニー・屋上	2	2	-	-	3	2	-	-	-	9
	車庫・駐車場	2	3	1	-	1	1	-	-	-	8
	その他	4	3	4	1	4	1	-	5	1	23
	小計	22	63	28	2	33	12	-	27	10	197
建物関係以外	敷地内	36	24	36	23	6	17	2	15	2	161
	公園・墓地	31	10	8	30	6	16	-	4	-	105
	道路	13	14	6	2	5	3	-	-	-	43
	河川敷	6	1	-	21	2	1	-	4	-	35
	車両	-	-	1	-	1	-	2	2	1	7
	屋外ごみ捨場	8	3	1	-	1	-	-	-	-	13
	その他	4	4	7	4	1	2	2	5	-	29
	小計	98	56	59	80	22	39	6	30	3	393
合計	120	119	87	82	55	51	6	57	13	590	

# 事例編

## 1 主な住宅火災の事例

### (1) たばこ

#### 【事例 1】 たばこの火種が落下したことにより死者が発生した住宅火災の事例

火災の程度	全焼	死傷者の発生状況	死者あり・負傷者あり
<p>この火災は、住宅で二人暮らしの居住者（男性・90代）が、ベッドの上でたばこを吸った際、たばこの火種が布団に落下し、無炎燃焼を継続後、火災となりました。この火災により、居住者 1 人がやけどにより亡くなり、もう 1 人は気道熱傷となりました。</p> <p>自宅で就寝中の隣人が「バンバン」という音が聞こえたので、外を確認すると、住宅から火が出ているのを発見したため、依頼を受けた家族が自宅の固定電話から 119 番通報しました。</p>			

#### 【事例 2】 たばこの不始末により死者が発生した住宅火災の事例

火災の程度	全焼	死傷者の発生状況	死者あり
<p>この火災は、住宅で二人暮らしの居住者（男性・50代）が、完全に火の消えていないたばこの吸い殻を不適当に捨てたことにより、時間の経過とともに付近のごみに着火し、火災となりました。この火災により、居住者 1 人がやけどにより亡くなりました。もう 1 人は外出中でした。</p> <p>自宅にいた隣人が「火事だ。」との声を聞き、外を確認すると、住宅から火が出ているのを発見したため、依頼を受けた家族が自宅の固定電話から 119 番通報しました。</p>			

### (2) こんろ

#### 【事例 1】 可燃物の接触により死者が発生した住宅火災の事例

火災の程度	半焼	死傷者の発生状況	死者あり、負傷者あり
<p>この火災は、共同住宅で三人暮らしの居住者 A が、お湯を沸かすためにやかんを火にかけ、その場を離れたところ、周囲のごみが崩れこんろの火に接触し、火災となりました。この火災により、居住者 C（女性・70代）がやけどにより亡くなり、居住者 A・B が気道熱傷となりました。</p> <p>居住者 B から火事だと聞いた居住者 A は、水道水や消火器により初期消火を試みましたが、失敗しました。近隣の住民が、外が騒がしいため確認すると、火煙が見えたので、火事だと思い自身の携帯電話から 119 番通報をしました。</p>			

#### 【事例 2】 着衣着火により負傷者が発生した住宅火災の事例

火災の程度	ぼや	死傷者の発生状況	負傷者あり
<p>この火災は、共同住宅の居住者（女性・60代）が、こんろ奥の炊飯器に手を伸ばそうとしたところ、こんろの火が着衣に着火し、火災となりました。</p> <p>居住者はシャワーの水をかけて消火を試みましたが失敗し、駆けつけた家族が着衣を破り捨て消火した後、携帯電話から 119 番通報をしました。</p>			

### (3) ストープ

#### 【事例 1】電気ストーブに可燃物が接触したことにより死者が発生した住宅火災の事例

火災の程度	部分焼	死傷者の発生状況	死者あり
<p>この火災は、周囲にあった衣類等の可燃物が電気ストーブに接触したため、火災となりました。この火災により、共同住宅の居住者（女性・80代）が、やけどにより亡くなりました。</p> <p>通行人が共同住宅から煙が出ているのを発見し、自身の携帯電話から 119 番通報しました。</p>			

#### 【事例 2】石油ストーブに可燃物が落下したことにより火災が発生した住宅火災の事例

火災の程度	ぼや	死傷者の発生状況	なし
<p>この火災は、共同住宅の居住者（男性・60代）が、石油ストーブの上で衣類を乾燥させたまま外出したところ、衣類が石油ストーブに落下し、火災となりました。</p> <p>住宅用火災警報器の鳴動音を聞いた隣人が、ドアを開け部屋の中を確認すると、煙の充満と炎が上がっているのを発見したため、部屋の中に入り、衣類に水道水をかけて初期消火を実施し、自身の携帯電話から 119 番通報しました。</p>			

### (4) その他の出火原因

#### 【事例 1】コードの半断線により死者が発生した住宅火災の事例

火災の程度	半焼	死傷者の発生状況	死者あり
<p>この火災は、何らかの荷重がかかったことによりテーブルタップのコードが半断線状態になり発熱し、周囲にあった衣類に着火し、火災となりました。この火災により、居住者 2 人（女性・40代、女性・70代）が、一酸化炭素中毒により亡くなりました。</p> <p>通行人が住宅の屋根から煙が上がっているのを発見し、自身の携帯電話から 119 番通報しました。</p>			

#### 【事例 2】電気冷蔵庫のコードの短絡により死者が発生した住宅火災の事例

火災の程度	半焼	死傷者の発生状況	死者あり
<p>この火災は、冷蔵庫のコードをねずみ等の小動物がかじったことにより配線が短絡し、火災となりました。この火災により、居住者（男性・60代）が、一酸化炭素中毒により亡くなりました。</p> <p>自宅にいた隣人は、就寝しようとしていたところ焦げ臭さを感じたため、外を確認すると、住宅から煙が出ているのを発見し、自身の携帯電話から 119 番通報しました。</p>			

#### 【事例 3】ロウソクの転倒により負傷者が発生した住宅火災の事例

火災の程度	ぼや	死傷者の発生状況	負傷者あり
<p>この火災は、住宅の居住者（女性・80代）が、停電のためクーラーボックスの上にロウソクを置き明かりをとって就寝したところ、ロウソクが転倒し近くにあった紙袋に着火し、火災となりました。</p> <p>居住者は、目を覚ますと、階段付近で炎が上がっているのを発見したため、洗面器に水を汲むなどし、初期消火を実施しました。その後、居住者が、近隣の建物の従業員に火災が発生したことを伝え、従業員が自身の携帯電話から 119 番通報しました。</p>			

## 2 住宅用防災機器等の主な奏功事例

### (1) 住宅用火災警報器

【事例 1】住宅用火災警報器の鳴動により早い発見、通報につながり火災を未然に防いだ事例					
火災の程度	非火災		死傷者の発生状況	なし	
発見者	隣人	通報者	隣人	初期消火	
<p>この火災は、住宅の居住者（女性・70代）が、食材を温めるために鍋を火にかけたまま、外出したため、煙が発生し住宅用火災警報器が鳴動しました。</p> <p>自宅にいた隣人は、住宅用火災警報器の鳴動音に気づき、外を確認すると焦げ臭さと煙が立ち上がっているのを発見したため、自身の携帯電話から 119 番通報しました。</p>					

【事例 2】住宅用火災警報器の鳴動により早い発見、通報につながった事例					
火災の程度	ぼや		死傷者の発生状況	なし	
発見者	隣人	通報者	隣人	初期消火	
<p>この火災は、住宅の居住者（男性・70代）が、たばこの吸い殻を灰皿に捨て外出したところ、たばこが布団に落下して火災となり、住宅用火災警報器が鳴動しました。</p> <p>自宅にいた隣人は、住宅用火災警報器の鳴動音に気づき、玄関から外を確認すると、煙は見えなかったが、焦げ臭さを感じたため、自宅の固定電話から 119 番通報しました。</p>					

【事例 3】住宅用火災警報器の鳴動により早い発見、通報、初期消火につながった事例					
火災の程度	ぼや		死傷者の発生状況	なし	
発見者	居住者	通報者	居住者	初期消火	あり
<p>この火災は、住宅の居住者（女性・90代）が、仏壇のロウソクに火を点けるために使用したマッチを小物入れに捨て隣室へ移動したところ、マッチの火が付近の可燃物に着火し火災となり、住宅用火災警報器が鳴動しました。</p> <p>居住者が、住宅用火災警報器の鳴動音に気づき、現場を確認すると、仏壇から炎が上がっているのを発見したため、ボウルに水を汲むなどし、家族と共に初期消火をしました。その後、居住者は自宅の固定電話から 119 番通報しました。</p>					

### (2) 消火器

【事例 1】消火器による初期消火により火災の延焼を防いだ事例					
火災の程度	ぼや		死傷者の発生状況	負傷者あり	
発見者	居住者	通報者	居住者	初期消火	あり
<p>この火災は、住宅の居住者（女性・50代）が、天ぷら油を温めるために鍋を火にかけたまま、椅子に座りうとうと眠ってしまったため、熱せられた油から出火し、火災となりました。</p> <p>居住者は、きな臭い匂いに気づき、急いでガスこんろの火を止め鍋の蓋を開けると、鍋から炎が立ち上がったため、玄関に置いてある消火器を使い、初期消火を実施しました。その後、居住者は自宅の固定電話から 119 番通報をしました。</p>					

**【事例 2】 消火器による初期消火により火災の延焼を防いだ事例**

火災の程度	ぼや	死傷者の発生状況	なし		
発見者	通行人	通報者	通行人	初期消火	あり
<p>この火災は、共同住宅の居住者（女性・60代）が、石油ストーブを使用していたところ、周囲にあった布団が石油ストーブに接触し、火災となりました。</p> <p>住宅用火災警報器の鳴動音を聞いた通行人が駆け付け、部屋の中を確認すると布団から煙が出ていたため、自身の携帯電話から 119 番通報後、共同住宅の共用部に設置されている消火器を使い、初期消火を実施しました。</p>					

**(3) エアゾール式簡易消火具****【事例 1】 エアゾール式簡易消火具による初期消火により火災の延焼を防いだ事例**

火災の程度	ぼや	死傷者の発生状況	なし		
発見者	居住者	通報者	居住者	初期消火	あり
<p>この火災は、共同住宅の居住者（女性・50代）が、ガステーブルのグリルで調理していたところ、グリル内の油が熱せられたことにより炎が立ち上がり、火災となりました。</p> <p>居住者が家族に火災の発生を伝えたところ、家族がエアゾール式簡易消火具を使い、初期消火を実施し、自宅の固定電話から 119 番通報しました。</p>					

## 資料編

### 1 区市町村別住宅火災状況

区名	世帯数	建物から出火した火災件数	住宅火災件数	住宅火災の割合
千代田区	37,787	105	10	9.5%
中央区	95,812	79	16	20.3%
港区	146,527	169	55	32.5%
新宿区	219,464	157	64	40.8%
文京区	123,472	52	28	53.8%
台東区	123,068	54	27	50.0%
墨田区	155,354	52	32	61.5%
江東区	274,831	89	45	50.6%
品川区	228,061	74	37	50.0%
目黒区	158,367	69	44	63.8%
大田区	398,687	120	81	67.5%
世田谷区	490,342	144	117	81.3%
渋谷区	140,170	83	31	37.3%
中野区	207,425	48	32	66.7%
杉並区	325,403	88	70	79.5%
豊島区	178,637	79	41	51.9%
北区	199,016	75	45	60.0%
荒川区	117,153	29	19	65.5%
板橋区	315,872	85	58	68.2%
練馬区	380,495	102	89	87.3%
足立区	357,044	110	86	78.2%
葛飾区	238,563	71	52	73.2%
江戸川区	346,934	95	70	73.7%
特別区合計	5,258,484	2,029	1,149	56.6%

市町村名	世帯数	建物から出火した火災件数	住宅火災件数	住宅火災の割合
八王子市	272,856	105	73	69.5%
立川市	93,435	49	23	46.9%
武蔵野市	77,854	24	14	58.3%
三鷹市	95,814	26	20	76.9%
青梅市	63,894	27	21	77.8%
府中市	127,224	34	23	67.6%
昭島市	55,010	16	4	25.0%
調布市	121,296	37	29	78.4%
町田市	200,182	72	50	69.4%
小金井市	61,909	22	16	72.7%
小平市	93,638	23	18	78.3%
日野市	90,870	33	20	60.6%
東村山市	74,210	20	16	80.0%
国分寺市	62,339	21	17	81.0%
国立市	38,642	10	7	70.0%
西東京市	100,220	27	21	77.8%
福生市	30,271	5	2	40.0%
狛江市	42,980	8	7	87.5%
東大和市	39,610	12	11	91.7%
清瀬市	36,152	13	10	76.9%
東久留米市	55,414	22	12	54.5%
武蔵村山市	32,128	16	11	68.8%
多摩市	73,160	28	20	71.4%
羽村市	25,781	18	9	50.0%
あきる野市	36,080	12	9	75.0%
瑞穂町	14,971	5	2	40.0%
日の出町	7,422	4	3	75.0%
檜原村	1,165	1	-	0.0%
奥多摩町	2,643	1	-	0.0%
多摩地区合計	2,027,170	691	468	67.7%
合計	7,285,654	2,720	1,617	59.4%

※ 世帯数は令和3年1月1日現在のもの  
「住民基本台帳による東京都の世帯と人口」  
(東京都の統計ホームページ)による

## 2 区市町村別住宅火災による死者状況

区名	死者発生件数	住宅火災件数	死者発生率※ (令和3年)	死者発生率※ (過去5年)
千代田区	-	10	0.0%	0.0%
中央区	-	16	0.0%	1.0%
港区	1	55	1.8%	1.4%
新宿区	1	64	1.6%	2.3%
文京区	-	28	0.0%	2.2%
台東区	3	27	11.1%	6.2%
墨田区	2	32	6.3%	4.3%
江東区	3	45	6.7%	5.4%
品川区	1	37	2.7%	4.2%
目黒区	2	44	4.5%	3.8%
大田区	2	81	2.5%	3.7%
世田谷区	4	117	3.4%	4.8%
渋谷区	-	31	0.0%	3.1%
中野区	2	32	6.3%	2.9%
杉並区	-	70	0.0%	5.4%
豊島区	1	41	2.4%	3.1%
北区	-	45	0.0%	4.4%
荒川区	2	19	10.5%	7.7%
板橋区	4	58	6.9%	3.3%
練馬区	4	89	4.5%	4.2%
足立区	1	86	1.2%	5.7%
葛飾区	2	52	3.8%	5.5%
江戸川区	1	70	1.4%	2.4%
特別区合計	36	1,149	3.1%	4.0%

※ 死者発生率 =  $\frac{\text{死者が発生した住宅火災件数}}{\text{住宅火災件数}}$

市町村名	死者発生件数	住宅火災件数	死者発生率※ (令和3年)	死者発生率※ (過去5年)
八王子市	3	73	4.1%	4.7%
立川市	1	23	4.3%	4.4%
武蔵野市	2	14	14.3%	10.9%
三鷹市	2	20	10.0%	5.8%
青梅市	1	21	4.8%	3.3%
府中市	3	23	13.0%	7.2%
昭島市	-	4	0.0%	5.6%
調布市	1	29	3.4%	4.8%
町田市	2	50	4.0%	1.9%
小金井市	1	16	6.3%	5.8%
小平市	-	18	0.0%	3.3%
日野市	-	20	0.0%	3.1%
東村山市	1	16	6.3%	6.0%
国分寺市	2	17	11.8%	4.8%
国立市	-	7	0.0%	0.0%
西東京市	1	21	4.8%	1.0%
福生市	-	2	0.0%	0.0%
狛江市	-	7	0.0%	2.5%
東大和市	1	11	9.1%	2.4%
清瀬市	1	10	10.0%	9.1%
東久留米市	1	12	8.3%	2.1%
武蔵村山市	1	11	9.1%	11.4%
多摩市	-	20	0.0%	0.0%
羽村市	1	9	11.1%	3.3%
あきる野市	1	9	11.1%	3.6%
瑞穂町	-	2	0.0%	0.0%
日の出町	-	3	0.0%	9.1%
檜原村	-	-	0.0%	0.0%
奥多摩町	-	-	0.0%	50.0%
多摩地区合計	26	468	5.6%	4.3%
合計	62	1,617	3.8%	4.1%

### 3 区市町村別放火火災状況

区名	放火火災数 件	総火災数 件	放火火災の割合
千代田区	4	127	3.1%
中央区	8	103	7.8%
港区	11	216	5.1%
新宿区	11	199	5.5%
文京区	4	63	6.3%
台東区	9	83	10.8%
墨田区	17	81	21.0%
江東区	16	129	12.4%
品川区	6	106	5.7%
目黒区	10	86	11.6%
大田区	23	175	13.1%
世田谷区	34	196	17.3%
渋谷区	14	129	10.9%
中野区	6	63	9.5%
杉並区	5	101	5.0%
豊島区	9	119	7.6%
北区	19	97	19.6%
荒川区	5	42	11.9%
板橋区	36	135	26.7%
練馬区	16	136	11.8%
足立区	41	174	23.6%
葛飾区	24	108	22.2%
江戸川区	43	148	29.1%
特別区合計	371	2,816	13.2%

市町村名	放火火災数 件	総火災数 件	放火火災の割合
八王子市	36	173	20.8%
立川市	8	73	11.0%
武蔵野市	9	36	25.0%
三鷹市	3	40	7.5%
青梅市	9	44	20.5%
府中市	15	69	21.7%
昭島市	6	30	20.0%
調布市	4	53	7.5%
町田市	21	112	18.8%
小金井市	-	25	0.0%
小平市	6	35	17.1%
日野市	10	51	19.6%
東村山市	2	34	5.9%
国分寺市	2	35	5.7%
国立市	2	15	13.3%
西東京市	4	33	12.1%
福生市	12	21	57.1%
狛江市	4	17	23.5%
東大和市	5	20	25.0%
清瀬市	1	17	5.9%
東久留米市	11	37	29.7%
武蔵村山市	4	22	18.2%
多摩市	16	43	37.2%
羽村市	3	23	13.0%
あきる野市	18	37	48.6%
瑞穂町	6	15	40.0%
日の出町	2	8	25.0%
檜原村	-	2	0.0%
奥多摩町	-	3	0.0%
多摩地区合計	219	1,123	19.5%
合計	590	3,939	15.0%

※ 治外法権及び管外からの延焼火災は、総火災件数のみ計上します。

## 4 広報資料（STOP！住宅防火シリーズ）

### (1) STOP！着衣着火

※ 掲載しているデータは2つ折りのリーフレットデータです。

#### 着衣着火を防ぐポイント

- 調理中は、**マフラー・ストールなどは外し**、すそや袖が広がっている服を着ている時は、特に**炎に接しないよう**に注意する。
- こんろのまわりに**物を置かない**。こんろのまわりの物を取る時に、着衣に燃え移る事例が多数発生しているので注意する。
- 鍋等の底から炎がはみ出さないよう、**適切な火力に調節**する。
- カセットこんろ等は取り扱い説明書をよく読んで**正しく使用**する。



#### 防災品を使用しましょう

- 防災品とは、火がついても容易に着火せず、着火しても延焼拡大を停止する自己消火性を備えた素材で作られた品物のことをいいます。

防災品ラベルは2種類あります



提供：日本防災協会

※ラベルには様々な様式があります。

右：防災品 左：非防災品



- 着衣着火を防ぐため、こんろなどの火気を使用する際はエプロンやアームカバーなどは**防災品**を身につけましょう。

同じタイミングで着火しても、防災品のエプロンは燃え広がらず、受傷リスクを大幅に軽減することができます。

#### もしも着衣に着火した時は

**脱ぐ、たたく、水をかける**などして早急に消火し、119番通報を行いましょう！！



#### 問合せ先

東京消防庁 防災部 防災安全課 電話番号 03-3212-2111 内線4196

令和4年10月発行



# STOP!

STOP！住宅防火シリーズ① 火災から大切な命を守ろう

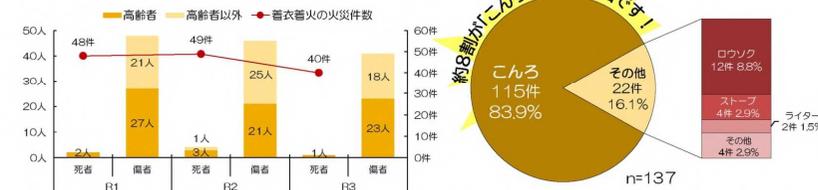
# 着衣着火

#### 着衣着火とは

着衣着火とは、調理中にこんろの火が袖口に燃え移るなど、何らかの火が身に付けている衣服に着火したことをいいます。

#### 着衣着火の発生状況

- 令和3年の死傷者が発生した着衣着火による住宅火災件数は40件で、前年と比較すると9件減少しています。
- 令和3年の着衣着火による死者数は1人で、前年と比較すると3人減少しています。



死傷者が発生した着衣着火件数・死者数・傷者数 (R1~R3住宅内 自損は除く) 出火原因別の死者が発生した着衣着火件数 (R1~R3住宅内 自損は除く)

東京消防庁

# 死傷者が発生した着衣着火のうち「こんろ」を出火原因とする火災は約8割を占めています

過去3年間の住宅火災で、こんろを出火原因とする着衣着火の主な事例をご紹介します(R1~R3住宅内120人中、死者6人、傷者114人)

## 顔・頸部(5人)

90歳代女性は、自宅の台所で調理をしていた際に、エプロンの袖がこんろの火に接触して、着火し、受傷した(中等症)。

## 手・腕(43人)

①20歳代女性はコンロで調理中に着衣に火が燃え移り、同居人20歳代男性に初期消火を依頼した。男性も初期消火中に受傷した。(男女ともに中等症)

②20歳代女性は、調理中ガステーブルの奥に置いてある調味料を取ろうとした際に、着ていた割烹着の袖がこんろの炎に触れて着火し、右手の甲を受傷した(軽症)。

## 胸部(4人)

60歳代女性は、調理中の鍋からはみ出したこんろの火が着衣のすそに着火し、上半身に掛けて燃え広がり受傷した(重症)。

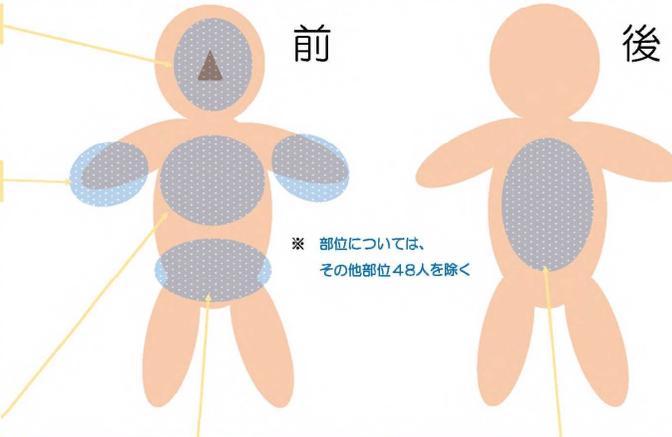
## 腹部(5人)

30歳代女性は、哺乳瓶を煮沸消毒中、こんろ上部のフックに調理器具をかけようとした際に、着衣に着火し、受傷した(軽症)。

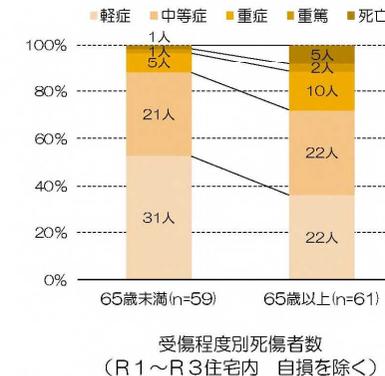
## 背部(15人)

70歳代女性は、調理のためこんろに火をつけ、後ろを向いたところ着衣に着火し受傷した(中等症)。

※ 部位については、  
その他部位48人を除く



高齢者は素早く消火ができず、重症化してしまう場合が多くあります。



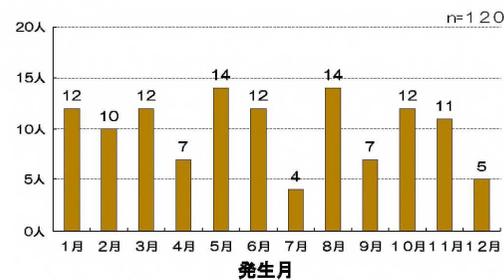
## 女性に多い

こんろによる着衣着火の死傷者は、女性が男性の3倍以上です。年齢では、80歳代が最も多く、20歳代及び90歳代を除き年齢が上がるごとに発生が多くなっています。



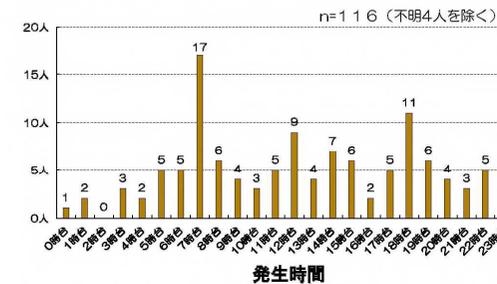
## 生活・服装の変化

こんろによる着衣着火の死傷者は、年間を通して発生しており、5月と8月に多く発生しています。



## 調理する時間帯に注意

こんろによる着衣着火の死傷者は、こんろを使用し調理する時間帯と考えられる7時台及び18時台で多く発生しています。



(2) STOP! たばこ火災

## たばこ火災から大切な命を守るために

■ 防災品を使いましょう。

**防災品**は、火が接しても容易に着火せず、着火しても延焼拡大を停止する自己消火性を備えた品物のことを言います。

じゅうたん、布団、シーツ等の身の回りの布製品は**防災品**を使いましょう！

防災品ラベルは2種類あります

消防庁登録番号

**防 災**

登録防災品名  
公益財団法人 日本防災協会

←防災物品ラベル  
↓防災製品ラベル

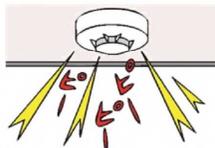
専 業 品 名

防 災 製 品 (注) 日本防災協会

提供：日本防災協会  
※ラベルには様々な様式があります。

■ 住宅用火災警報器を設置しましょう。

設置場所は、**全ての居室・台所・階段**です。火災の煙や熱を感知した警報音に気づき、早い通報や消火により被害を最小限に抑えた事例が多くあります。

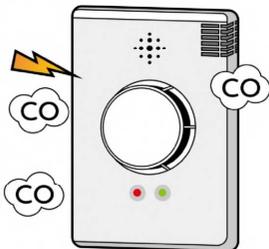


## CO機能付き住警器でより安心！

たばこによるごく小さな火種は、布団等に落ちるとすぐに燃え広がらずしばらく**無炎燃焼(炎を出さずに燃え広がる)**を続け、**一酸化炭素(CO)**を放出し、燃え広がる前に出火室内や他の部屋にも充満する場合があります。

一酸化炭素(CO)は無色・無臭で毒性が強い気体です。無炎燃焼が継続して濃度が高まると、一酸化炭素中毒により死に至る危険性があります。

燃焼で発生する一酸化炭素(CO)から、いち早く火災を感知するため、**CO機能付き住宅用火災警報器**を設置するとより安心です。



### 問 合 せ 先

東京消防庁 防災部 防災安全課 電話番号 03-3212-2111 内線4196

令和4年10月発行

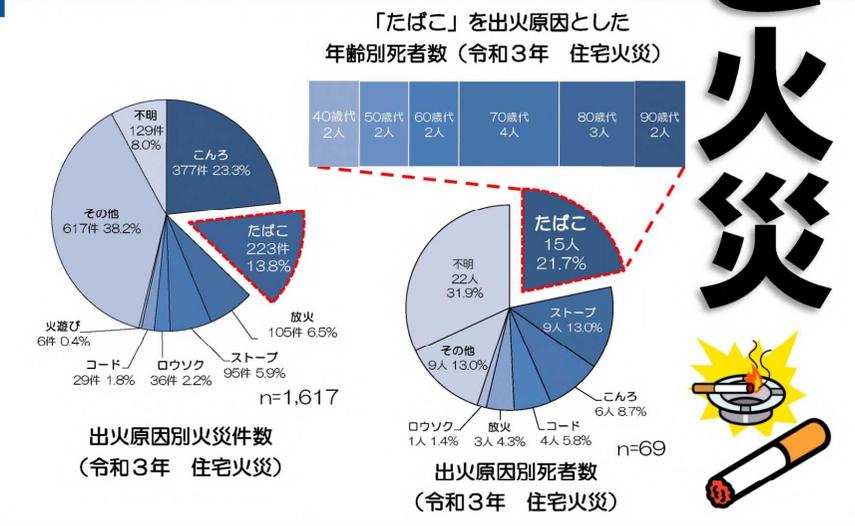
# STOP!

**STOP! 住宅防火シリーズ② 火災から大切な命を守ろう**

## たばこ火災の発生状況

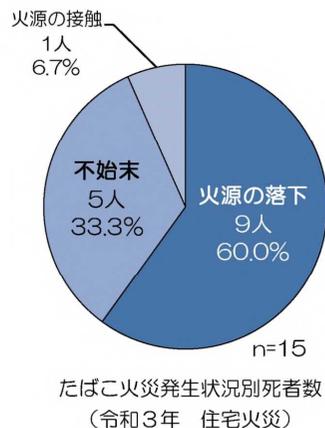
- 出火原因「たばこ」による住宅火災は、「こんろ」に次いで2番目に多く発生しています。
- 住宅火災のうち「たばこ」を出火原因とした住宅火災で、**最も多く死者**が発生しています。
- 「たばこ」を出火原因とした住宅火災の死者は、高齢者で多く発生しています。

たばこ火災



## 東京消防庁

## たばこ火災発生原因



たばこによる住宅火災の死者15人中9人が、「たばこの火種が落下する」ことで発生した火災で亡くなっています。



## あなたにも起こりうるたばこ火災

### 事例①: 死者が発生した「たばこ」による住宅火災

共同住宅の居住者(女性・40歳代)がたばこの火種を灰皿の上で消した後、ごみ箱に捨てたことにより残っていた火種が中のごみくずに着火し火災となったもの。



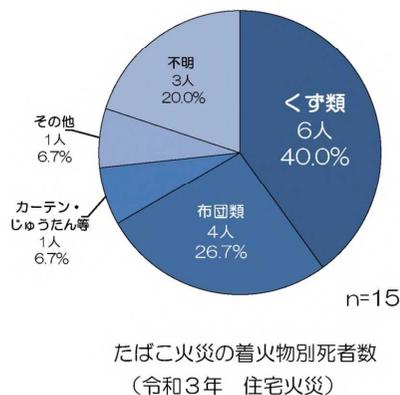
### 事例②: 死者が発生した「たばこ」による住宅火災

長屋兼共同住宅の居住者(男性・70歳代)が、在宅酸素吸入器使用中、寝たばこをし、火源が鼻カニューレに落下したことにより穴が空き、送気されていた高濃度酸素により火種が拡大し火災となったもの。

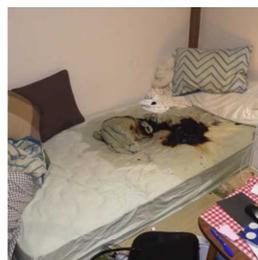


たばこの火源が鼻カニューレに着火する検証実験の状況

## たばこ火災の着火物は何か？



着火物別の死者数では、くず類、布団類、カーテン・じゅうたん等の順で多くなっています。



寝たばこにより火源が落下し布団に着火した火災

## たばこ火災を防ぐポイント

- **寝たばこ**は絶対にしない。
- **飲酒**しながら喫煙し、**うたた寝**をしないようにする。
- 吸殻を灰皿やごみ箱にためないようにする。
- 吸殻を捨てる時は、必ず**水をかけ完全に消火**する。
- 火種を落とさないよう**安全な場所で喫煙**する。
- くわえたばこをしながらの作業等はしないようにする。



就寝前や外出前のたばこ、  
吸殻の捨て方に注意しましょう！



火災防止のポイントは裏面をチェック！

### (3) STOP!ストーブ火災

## ストーブ火災を防ぐポイント

- 外出時や就寝時は必ず消す。
- 周囲に燃えやすいものを置かない。
- 布団やカーテン等を近くに置かない。
- ストーブの上や近くで洗濯物を乾かさない。
- 給油は必ず消してから行う。



## ストーブ火災に備えて

住宅用火災警報器を全ての居室・台所・階段に設置しましょう

### 住宅用火災警報器の設置により火災の拡大を防いだ事例

バスマットを電気ストーブにかけていたところ、何らかの原因でストーブのスイッチが入り、火災となりました。住宅用火災警報器の鳴動により火災に気づき、119番通報と消火器による初期消火を実施し、火災の拡大を防ぎました。



カーテンやじゅうたん、寝具類など住宅内の布製品は防災品にしましょう

### 防災品の使用により延焼拡大を防げたかもしれない事例

ダイニングテーブルの下で使用していた電気ストーブの電源をつけたまま外出し、付近に置いていた木製椅子の脚及び座布団等の可燃物が電気ストーブに接触して出火しました。



防災品ラベルは2種類あります



※ ラベルには様々な様式があります。

**防災品**は、火が接触しても容易に着火せず、着火しても延焼拡大を停止する自己消火性を備えた品物です。

## 問合せ先

東京消防庁 防災部 防災安全課 電話番号 03-3212-2111 内線4196

令和4年10月発行



# STOP!

STOP! 住宅防火シリーズ③ 火災から大切な命を守ろう

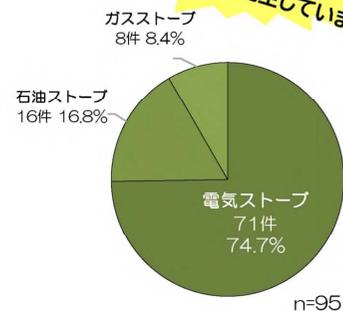
## あらゆる器具で発生するストーブ火災

- 令和3年中、東京消防庁管内において、ストーブを出火原因とする住宅火災が95件発生しました。
- 電気ストーブ、石油ストーブ、ガスストーブが原因で火災が起きています。特に**電気ストーブによる火災が74.7%**で、非常に高い割合となっています。



電気ストーブに布団が接触し焼損した状況

火を使わない電気ストーブでも多くの火災が発生しています!



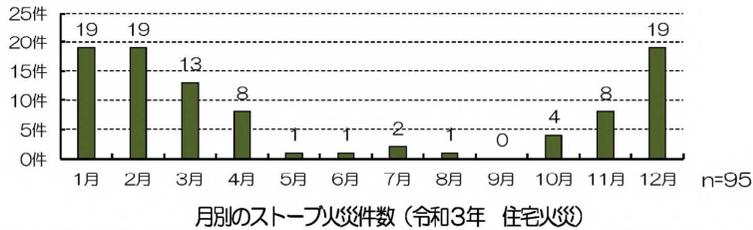
出火原因ストーブの内訳 (令和3年 住宅火災)

# ストーブ火災

東京消防庁

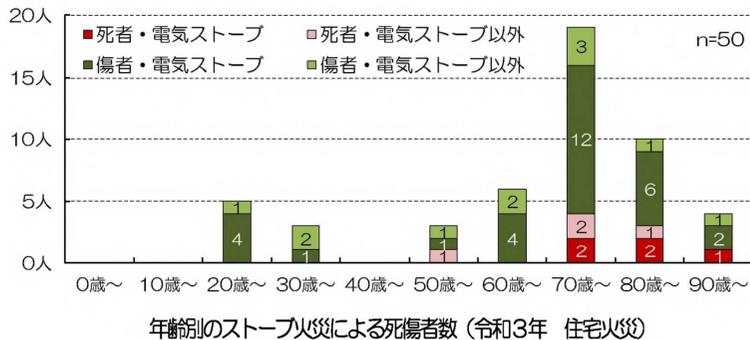
## 寒い時期を中心に発生！

- ストープ火災は、**12月から3月までの寒い時期**を中心に発生しており、肌寒い季節にも注意が必要です。



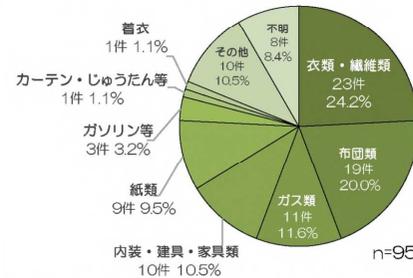
## 死傷者の発生状況

- ストープ火災による**死者は9人**で、このうち**5人は電気ストーブ**が出火原因となっています。また、50歳以上で死者が多くなっています。
- ストープ火災による**死傷者は計50人**(死者9人、傷者41人)で、このうち7割の35人は電気ストーブが出火原因となっています。また、死者9名のうち8名が高齢者となっています。



## ストーブの周りに物を置かない

- ストープ火災95件のうち、**衣類・繊維類**や**布団類**の可燃物に着火した件数は42件で、44.2%となっています。
- ガス類(スプレー缶等)も着火物となり得ます。

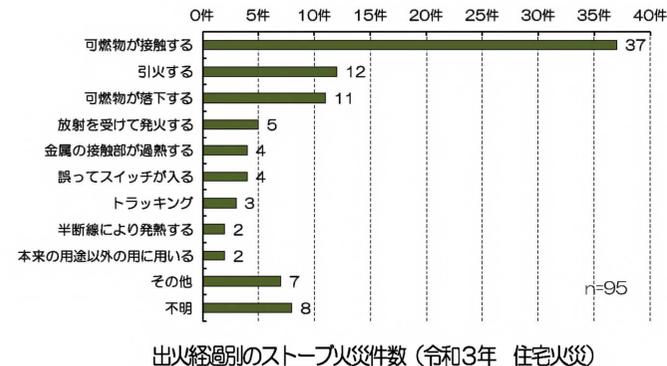


室内でストーブが原因となりスプレー缶内のガスに引火し爆発した火災 (屋外ベランダの様子)

スプレー缶廃棄時の火災も発生しています！

- 可燃物とストーブが接触することや、ストーブ付近のスプレー缶等が高温になって破裂し、漏れたガス類へ引火し爆発することによって、火災が発生しています。

スプレー缶を捨てる時は穴をあけたりせず、**必ず最後まで使い切ってから**自治体の廃棄方法に従って捨てましょう。



#### (4) STOP! こんろ火災

### こんろ火災を防ぐポイント

- 調理中にこんろから離れない。
- こんろの周りに燃えやすいものを置かない。
- 換気扇や魚グリル等は定期的に掃除する。
- こんろの上や奥にあるものを取るときは、火を消す。
- 防災品のエプロンやアームカバーを使用する。
- 火が鍋底からはみ出さないように調節する。
- 安全機能付きのこんろ\*を使用する。



防災品ラベルは2種類あります

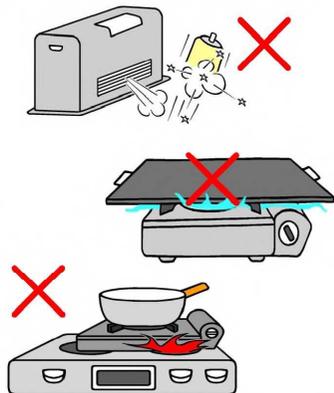


※ 現在製造されている家庭用ガスこんろは全て全口に調理油過熱防止装置、立ち消え安全装置、こんろ・グリル消し忘れ消火機能を有する Siセンサーこんろ です。

### カセットこんろは適切に使いましょう

カセットこんろによる住宅火災では、鍋などからはみ出した炎が着衣に着火したり、不適切な使用でボンベが爆発したりし、死者や負傷者が発生しています。次のことに注意して安全に使用しましょう。

- カセットボンベを暖房器具の前や高温になる場所に置かない。
- カセットこんろ全体をおおうような大きな調理器具は使用しない。  
★ボンベが高温になり爆発の原因に！
- IHクッキングヒーターやガスこんろの上にカセットこんろを置かない。  
★誤って下のこんろのスイッチを入れて爆発する事故が発生！



### 問合せ先

東京消防庁 防災部 防災安全課 電話番号 03-3212-2111 内線4196

令和4年10月発行

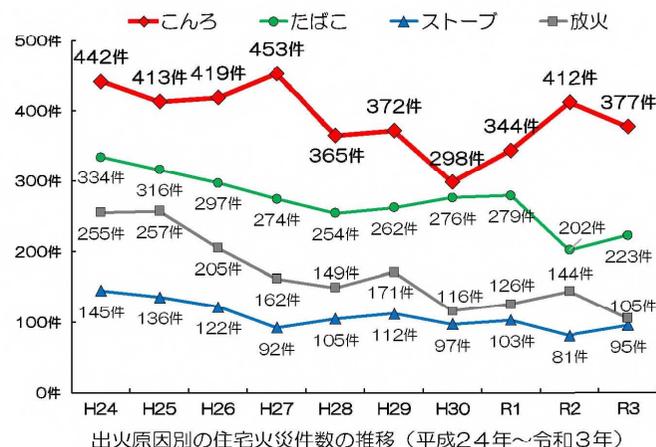
# STOP!

STOP! 住宅防火シリーズ④ 火災から大切な命を守ろう

## 住宅火災の出火原因で最も多いこんろ火災

■ 毎年、住宅火災の出火原因の中で一番多いものはガスこんろや電気こんろ等の「こんろ」です。

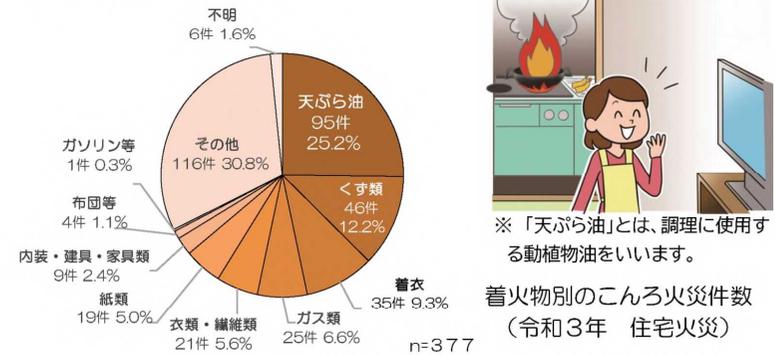
# こんろ火災



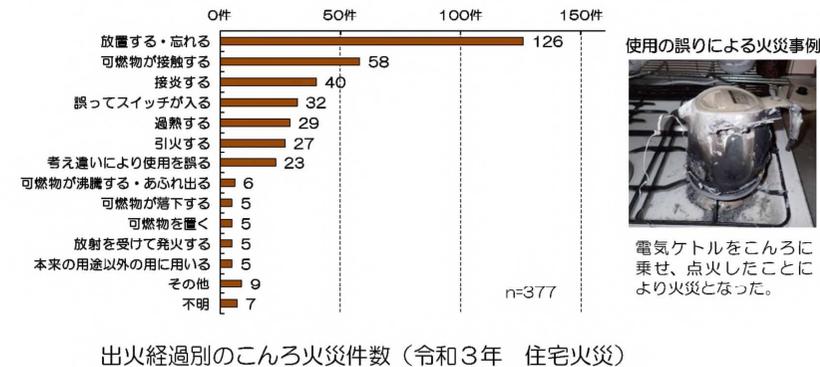
東京消防庁

## 調理中に離れない

- 令和3年中、こんろ火災は377件発生し、「天ぷら油」に着火して火災に至った件数が最も多くなっています。
- 油かすやごみくずの「くず類」、身に付けている衣服に着火した「着衣」の件数も多くなっています。



- 火をつけたまま放置し忘れること、そしてくず類などの可燃物がこんろの火と接触することで火災が発生していることがわかります。
- ★調理中に**こんろから離れず**、離れる場合には**こんろの火を必ず消す**ことが火災を発生させないポイントです。



## 死傷者の発生状況

- 死者6人のうち、男性は3人、女性は3人で、65歳以上の高齢者となっています。
- 傷者は113人で、男性が46人であるのに対して、女性が67人と、女性の傷者が多くなっています。



## 住宅用火災警報器の設置で被害軽減

全ての居室・台所・階段に住宅用火災警報器の設置が必要です

### 奏功事例

共同住宅の居住者(男性・40歳代)が、鍋を火にかけてそのまま就寝し、鍋が過熱され続け空焚き状態になり、発生した煙を住宅用火災警報器が感知した。隣に住んでいる住人が、住宅用火災警報器の鳴動音とベランダから煙が出ているのを見つけ、自身の携帯電話で119番通報し、火災を未然に防いだ。



## 備えましょう 消火器



～火を使う場所に備えましょう～

消火器による初期消火は、火災の被害軽減や抑制に効果的です。一般住宅向けの小型で軽量の住宅用消火器や、片手でも使用できるエアゾール式消火器具もあります。

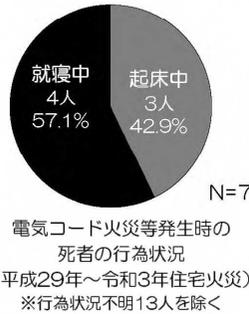


調理中の鍋が空焚きになったことで火災となった。火が上がっていても消火器があれば延焼拡大を防ぐことができる。

(5) STOP! 電気火災

**住宅用火災警報器で早期発見**

- 電気コード火災等によって亡くなった方は、約6割が**就寝中**に発生した火災により命を落としています。
- 住宅用火災警報器は火災の煙や熱を感知し、警報音を発します。
- 住宅用火災警報器を**全ての居室・台所・階段**に設置することで、火災が小さいうちに発見し、自分の命を守ることができます。



**設置してよかった住宅用火災警報器**

共同住宅の居住者(男性・30歳代)の居室で、長年電気コードが極端に折れ曲がった状態で使用されていたため、内部の線が半断線していました。半断線により電線に過度の電流が流れたため、発熱し、短絡して火災となりました。

隣人が、住宅用火災警報器の鳴動音に気づき119番通報するとともに、消火器で初期消火を行ったため、火災の延焼を防ぎました。

**適切な維持管理を**



住宅用火災警報器がホコリなどで汚れている場合、火災を感知しにくくなります。定期的に乾いた布で拭き取りましょう。

また、設置後10年を経過したものは電子部品の劣化等により火災を感知しなくなるおそれがありますので、**機器本体を交換**しましょう。

※一般的に点検の際の音声等は自動で停止します。

**点検も忘れずに!**



**問合せ先**

東京消防庁 防災部 防災安全課 電話番号 03-3212-2111 内線4196

令和4年10月発行

# STOP!

STOP! 住宅防火シリーズ⑤ **火災から大切な命を守ろう**

# 電気火災

**身近に潜む電気火災危険**

電気火災とは、電気や電気製品にかかわる火災のことをいいます。

- 電気火災の中でも電線の短絡・トラッキング・半断線等によって起こる火災(以下「電気コード火災等」という。)は、**火を使用している意識がないため、火災に気づきにくい**特徴があります。
- 令和3年中、電気コード火災等は371件発生し、火災件数は年々増加しています。火災件数の増加とともに、死者数も増加しています。
- 電気コード火災に至る経過として、電線の短絡、金属の接触部過熱、トラッキングの順で発生しています。

電気コード火災等の件数及び死者数 (平成29年～令和3年 住宅火災)

年	高齢者 (人)	高齢者以外 (人)	電気コード火災等件数 (件)
29年	1	2	266
30年	2	2	281
元年	1	2	288
2年	1	4	298
3年	6	6	371

経過別の電気コード火災等件数 (平成29年～令和3年 住宅火災)

原因	件数 (件)
電線が短絡する	647
金属の接触部が過熱する	382
トラッキング	224
過剰の電流(含電圧)が流れる	83
半断線により発熱する	69
絶縁劣化により発熱する	54
スパークする	22
漏電する	10
地絡する	8
その他	15

N=1,504

## 東京消防庁

## 電線の短絡(ショート)・半断線

電気コードの家具等による踏みつけ、束ねての使用、折れ曲がったままの使用は、電気コードの被覆の損傷や温度上昇、経年劣化による短絡(ショート)、半断線による発熱を引き起こし、火災の原因になります。

- 電気コードを家具の下敷きしない。
- 束ねて使用しない。
- 折れ曲がりに注意する。



※ 半断線とは、コード内部の線が一部断線した状態のことをいいます。

- すでに被覆がはがれているコードは使用しない。

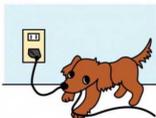
### 死者が発生した火災事例

#### 半断線により出火した火災

この火災は、何らかの荷重がかかったことによりテーブルタップのコードが半断線状態になり発熱し、周囲にあった衣類に着火して火災となりました。この火災により、居住者2名(女性・40歳代、女性・70歳代)が亡くなりました。

#### 小動物が原因となった火災

冷蔵庫のコードをねずみ等の小動物がかじったことにより配線が短絡し、火災となりました。この火災により、居住者(男性・60歳代)が亡くなりました。



**普段利用している電気製品から  
気づかぬうちに火災しています！**

## 金属の接触部の過熱

プラグがコンセントにしっかり差し込まれていなかったり、プラグの差し刃が変形していたりすると、過熱して火災の原因になります。



- プラグはコンセントにしっかり差し込む。
- プラグ・コンセントは変形等がないか定期的に点検する。

## トラッキング

コンセントに差したプラグの差し刃の周りにほこりが付着していると、湿気を帯びたほこりが電気回路を形成し放電を繰り返すことで火花が発生し、火災となります。

- コンセント周りは定期的に点検・清掃する。
- 使用しないプラグは抜いておく。
- 家具や大型家電製品の裏など、見えにくい場所のコンセントには特に注意する。



## 過多の電流



電源タップを決められた容量以上で使用すると発熱し火災の原因になります。

- 電源タップは決められた容量内で使用する。